

総説

碎葉鎮城の建設とアク・ベシム遺跡シャフリスタン1の都市プランの変化

Construction of 碎葉鎮城 (Suiye zhencheng) and the Transformation of the Plan of the First Shahristan, Ak-Beshim

山内和也[※]

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

- I. 問題の所在と本論文の目的
- II. 非線対称性の分析
- III. 初期の都市の平面プランとその変化
- IV. 発掘調査の成果による仮説の検証
- V. 唐軍が建設した「コの字型」の壁とその位置

VI. 「コの字形」の壁とシャフリスタン2の外周壁との関係

VII. 碎葉鎮城の建設とシャフリスタン1の平面プランの変遷

VIII. 王方翼の碎葉城の建設と王正見の碎葉攻撃

おわりに

はじめに

アク・ベシム遺跡はキルギス共和国北部のチュール川流域に位置する都市遺跡である(図1)。かつて「スイヤブ」と呼ばれていたシルクロードの拠点的な交易都市であり、2014年には、「シルクロード：長安-天山回廊の交易路網」の構成資産の1つとしてユネスコの世界遺産リストに記載された。

この遺跡は隣り合う2つの都市遺跡(街区)からなっている(図2、図3)。西側に位置する台形状の街が、現在、シャフリスタン1と呼ばれるものであ

る。このシャフリスタン1は5～6世紀頃にシルクロードの交易の民であるソグド人が建設したとされる街で、10世紀にいたるまで国際交易の拠点の1つとして繁栄し、12世紀頃に都市としての機能を失ったものと考えられている。その東側に位置するシャフリスタン2は不整五角形をなす街で、これが中国の唐が建設した「碎葉鎮城」である。少なくとも679年には建設され、8世紀の初めに放棄された唐の軍事・行政拠点である。このシャフリスタン2は、かつて「ラバト」あるいは契丹区と呼ばれ、11～12世紀頃の都市遺跡と考えられていたが、現在では、

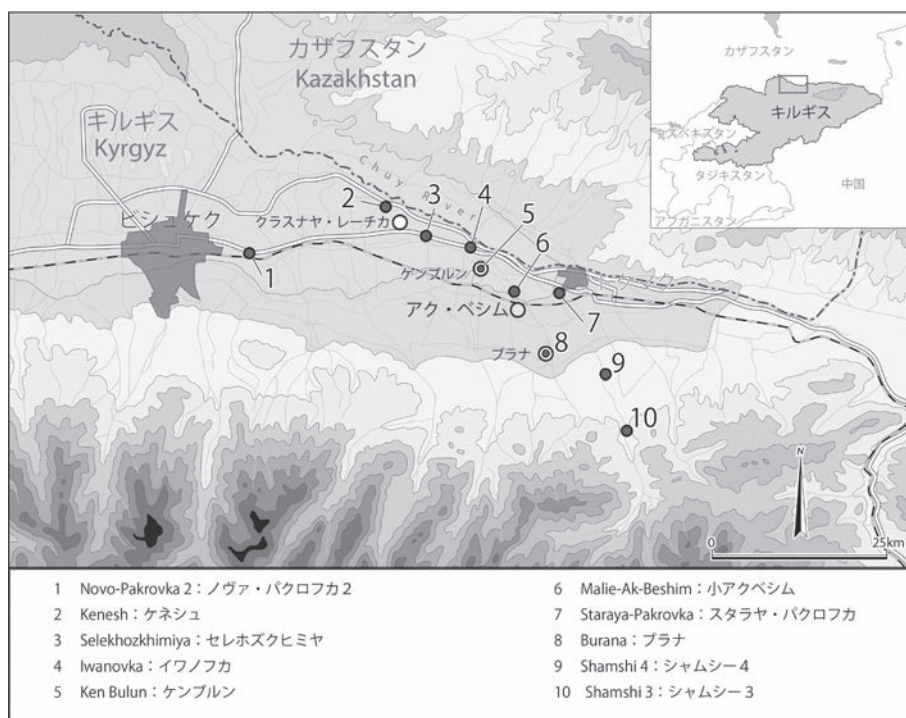


図1 アク・ベシム遺跡と周辺の都市遺跡

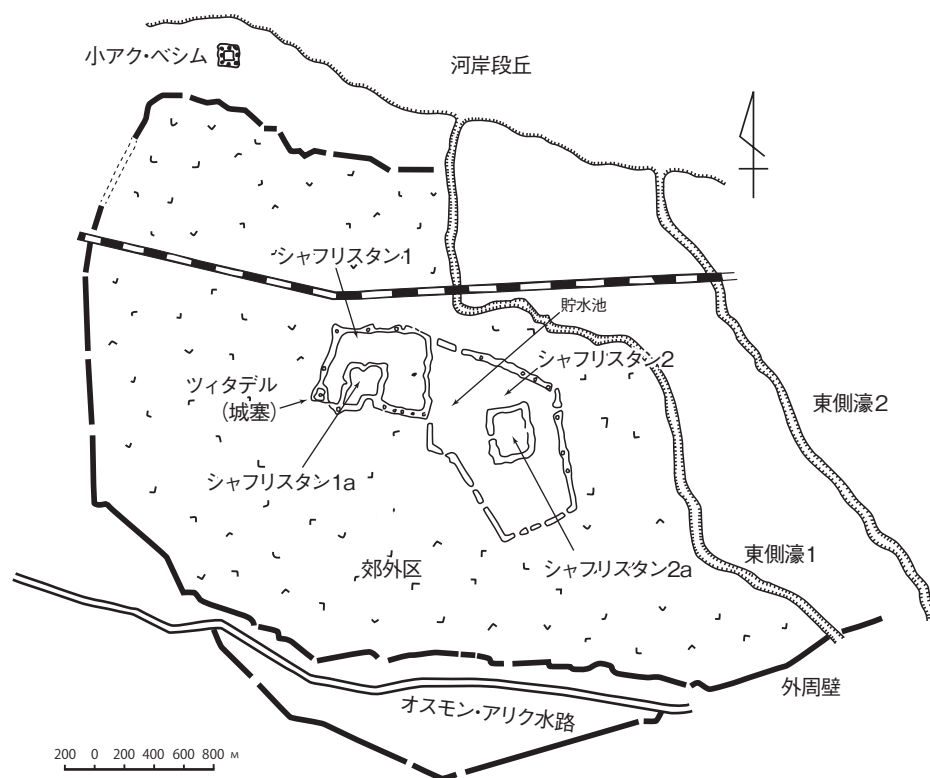


図2 アク・ベシム遺跡全体図および呼称



図3 アク・ベシム遺跡の発掘地点番号

このシャフリスタン2が碎葉鎮城であったことが明らかとなっている。

かつてベルンシュタム（図4）、クズラソフ（図5、6）、カジミヤカ（図7）によって作成された遺跡地図図においても2つの都市遺跡、つまり西側に位置するシャフリスタン1と東側に位置するシャフリスタン2の形状が記されている。また、1966年に撮影された空中写真では、シャフリスタン2の不整五角形の外壁とその中に位置する長方形の内城壁、内外壁の内側に位置するいくつかの建物の痕跡等が確認できる（図8）。しかしながら、シャフリスタン2については、1970年代に行われたブルドーザーによる大規模な削平と耕地整備のために、現在ではその外壁の東壁と南壁の一部を除き、かつて地表で確認できた痕跡の大部分が失われている（図9）。

本論文は、筆者が2019年に発表した「アク・ベシム遺跡第1シャフリスタンの都市プランの変化」（山内 2019）を基に、それ以降の発掘調査の成果を踏

まえて大幅に加筆修正したものである。²⁾

2019年の論文では、「第2シャフリスタンの壁を構築する際には、まず北壁、東壁、南壁、南西壁を構築し、その後、第1シャフリスタンの北壁、東壁、南壁を改築したものと考えられる」と結論付けた（山内 2019, p.17）。また「アク・ベシム遺跡の第1シャフリスタンの平面プランの非対称性の要素に注目することで、第2シャフリスタン、つまり碎葉鎮城の建設にともなって第1シャフリスタンの平面プランに生じた変化を明らかにすることができた。しかしながら、碎葉鎮城の建設の際に、なぜこのような改築が必要であったのか、その理由はなんであったのかはこれからの課題である」と述べた（山内 2019, p.17）。

その後、帝京大学とキルギスの国立科学アカデミーによってAKB-19区（2019年）とAKB-8区（2023年）で発掘調査が行なわれたことで新たな知見が得られている。本論文では、2019年の論文を基とし、



図4 ベルンシュタムが作成したアク・ベシムの遺跡地図
（Bernsham 1950, Таблица XVIII を基にトレース）

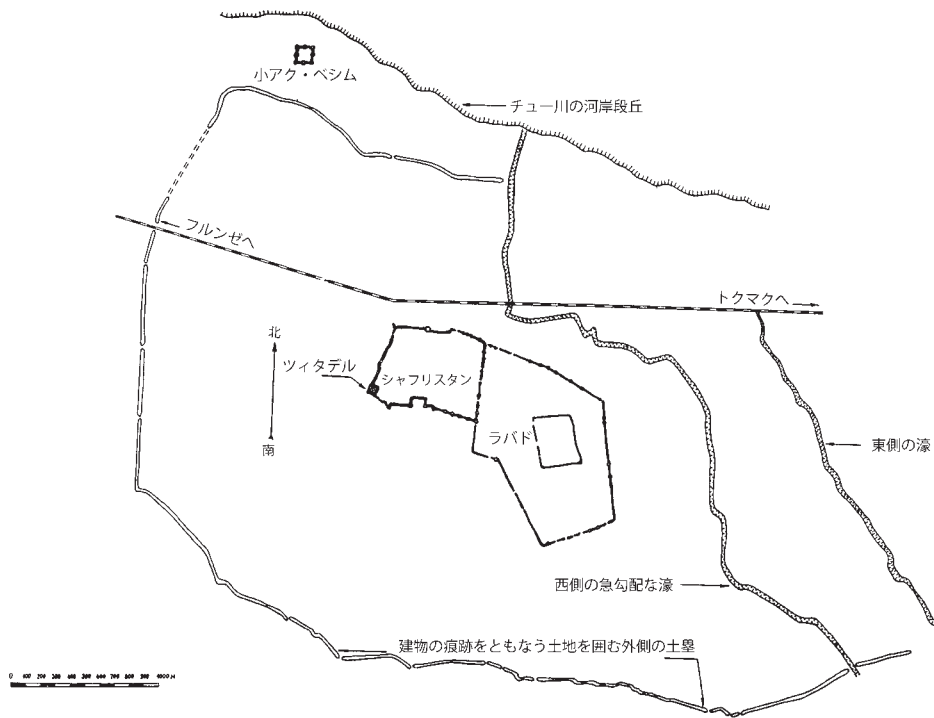


図5 アク・ベシム都市遺跡の概略平面図。カジミヤカによる簡易測量
(Кызласов 2006, Рис 43 を基にトレース)

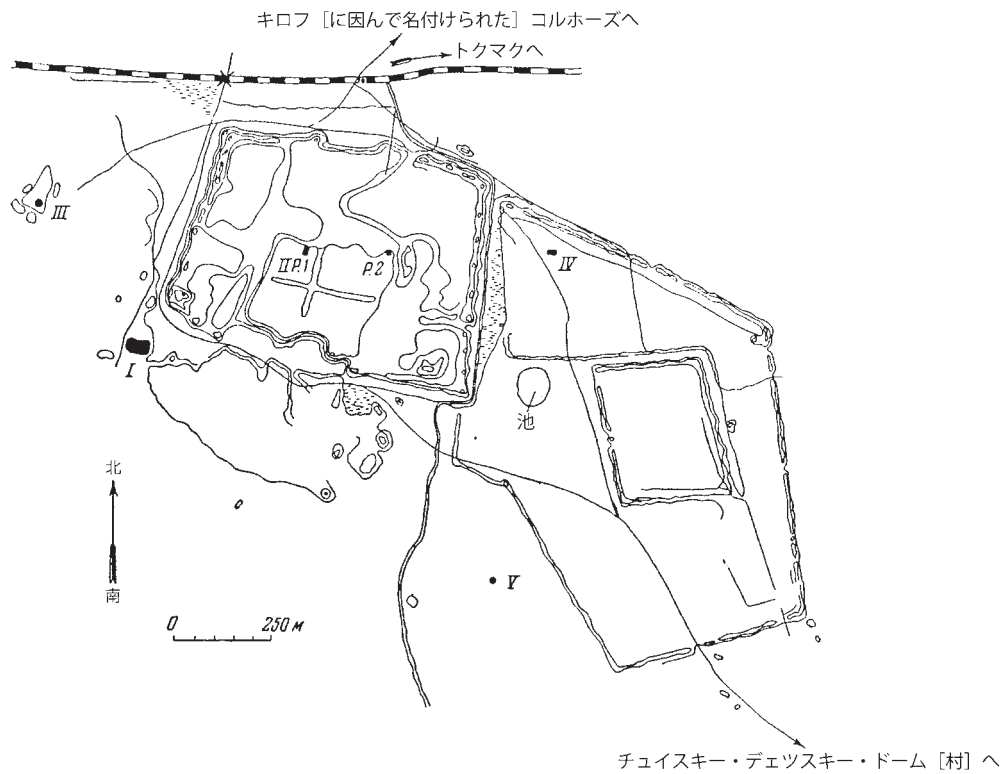


図6 アク・ベシム都市遺跡の概略図および1953～1954年に発掘された第Ⅰ～Ⅴ号遺構
(Кызласов 2006, Рис 44 を基にトレース)



図7 カジミヤカが作成したアク・ベシムの遺跡地図
(Кожемяко 1959, Рис. 2 を基にトレース)



図8 1966年に撮影された空中写真



図9 2016年に撮影された空中写真

1966年に撮影された空中写真³⁾、2016年に撮影されたドローンによる空中写真、そして発掘調査の結果（AKB-8区、AKB-16区、AKB-17区、AKB-19区）に基づき、碎葉鎮城（＝シャフリスタン2）の建設との関連から、シャフリスタン1の平面プランの変遷について考察する。

本論に進む前に、玄奘が見た「素葉水城」について述べておく。玄奘の『大唐西域記』では「素葉水城」について次のように記されている（水谷 1971, pp. 19-20、[] は筆者追加）。

清池「イッシク・クル湖」の西北に行くこと五百里で素葉水「スイヤブ」城に至る。城の周囲は六、七里で、諸国の商胡（商業に従事する胡人）が雑居している。土地は糜・麦・葡萄によく、木立はまば

らで気候は風寒く、人々は氍（細毛の織物）や褐（粗い毛織物）をきている。

唐代の「里」は約400～440mとされていることから（水谷 1971, pp. 416-417）、「城」、つまり城壁で囲まれた街の大きさは、「周囲」が約2400～2800m（1里＝400m）から2640～3080m（1里＝440m）となる。現在残されているシャフリスタン1の全周は2459mであることから⁴⁾、玄奘は、街を取り囲む外周壁（図2参照）ではなく、シャフリスタン1を「素葉水城」と呼び、その大きさを伝えていることがわかる。⁵⁾

また、これまでの帝京大学とキルギス国立科学アカデミーの調査によって、現在シャフリスタン2と呼ばれている区画は「碎葉鎮城」であることが明らかとなっており、さらに玄奘がこの地を訪れた時（異

論はあるが、ここでは630年とする）には碎葉鎮城（＝シャフリスタン2）は存在していなかったことから、玄奘が「素葉水城」と呼んだのは現在のシャフリスタン1であったことが理解される。とはいえ、現在見るような形ではなく、碎葉鎮城の建設にともなって改変される前の街であったことは言うまでもない。

I. 問題の所在と本論文の目的

シャフリスタン1は東西約860m（北壁の長さは約660m、南壁の長さは約860m）、南北約510m（東壁の長さは約510m、西壁は長さ約430m）の東西方向に長い、いびつな台形をなしている（図10）。一見すると、線対称のようにも見えるが、実際には、西側半分の形状は台形に近く、その一方で東側半分の形状は台形というよりもむしろ長方形をなしていることがわかる。また、東壁の長さは約510mであるのに対し、西壁は長さ約430mであり、東西の壁の長さも異なっている。さらには、南壁について見てみると、東側半分はほぼ直線的な壁であるのに対し、西側半分は屈曲した壁となっている（図11）。このように、現状では、シャフリスタン1の形状は非線対称形となっていることが理解される。

すなわち、シャフリスタン1の平面プランの特徴としては以下の点が挙げられる。

- ・全体としてみれば、平面プランは東西方向に線対称となっているように見えるが、詳細に分析すると

非線対称となっている。

- ・西側半分の壁は凹凸が顕著であるが、東側半分の壁のラインは直線的であり、壁の幅についても西側に比べて、東側の壁の幅が広がっている。

シャフリスタン1の平面プランにおけるこのような特徴は、シャフリスタン2、つまり碎葉鎮城の建設にともなって、もともとのシャフリスタン1の東側半分が改変されたことによるものと考えられる。本論文の目的は、空中写真等の資料や発掘調査の成果を基に、シャフリスタン1が当初は線対称であったものと仮定し、それに基づいたシャフリスタン1の平面プランの変遷に関する仮説を提示することにある。さらには、シャフリスタン1の建設当初の平面プランを明らかにするとともに、それ以後に生じたシャフリスタン1の東側半分の改変の理由を明らかにすることを目指すものである。

II. 非線対称性の分析

現在見られる非線対称形の平面プランの非線対称性を理解するために、ひとまずシャフリスタン1の形状が建設当初は東西方向に線対称形であったと仮定し、周壁および内側の平面プランにおいてそれにそぐわない部分を抽出してみる。

II-1. 南壁（図11～21）

- ・南壁のほぼ中央には凹状となっている部分があり、これが街、つまりシャフリスタン1の出入口（以



図10 シャフリスタン1（左 1966年撮影、右 2016年撮影）



図 11 第1 シャフリスタン南壁（1966 年撮影の空中写真）



図 12 第1 シャフリスタンを南北に貫く街路



図 13 南壁：南から



図 14 南壁：南門、南から



図 15 南壁：南門の東側出入口、南西から



図 16 南壁：南門の西側出入口、南東から



図 17 南壁：東側部分、南東角から



図 18 南壁：東側部分、南西角から



図 19 南壁：東側の張り出し部分

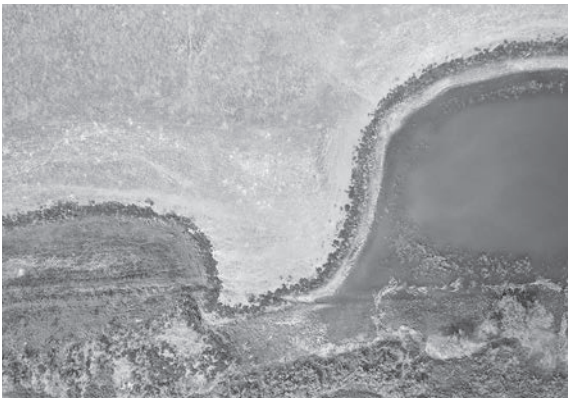


図 20 南壁：西側の張り出し部分



図 21 南壁：東側部分の前面にある窪地

下、南門）であったと考えられる。この凹状部分の中心から東壁の中心線までは約420m、そして西壁の中心線までは約340mである。つまり、南門の中心線は西へ約40m寄っており、南壁の中心に位置していない。

- ・南門の凹状部分の東側と西側には出入口があったものと考えられる。西側の出入口に関しては、現在でもそこから北門に向けて伸びる街路の痕跡が明瞭であり、発掘調査によってもその存在が確認されている（『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』、『アク・ベシム（スイヤブ）2018』、『アク・ベシム（スイヤブ）2019』）。それに反して、東側の出入口に関しては、その痕跡は認められるものの、かつて存在したと推測される北門へと伸びる街路の痕跡は、現状では不明瞭となっている（図12）。

- ・南壁の東側の壁はほぼ直線をなしているのに対し、西側の壁は凹凸があり、屈曲している。とくに、

南門をなす凹状部分の東側と西側部分を比較してみると以下の点が確認できる。つまり、西側については、いったん壁が張り出したのち、もう一度北側に引っ込んだうえで、さらに西側に直線的に伸び、もう一度南側に張り出している。それに対し、東側については、張り出し部の東側に引っ込んだ部分の痕跡は存在するものの、そのさらに東側については、南側に張り出したまま直線的な壁となっている（図11）。

- ・一般的に、東側の壁は、西側の壁に比べて壁の幅が広い（図10）。

- ・壁そのものに関することではないが、南壁の前面、つまり南壁の南側について見ると、西側と比べて、東半分の前面は周囲よりも一段低い窪地になっていることが確認できる。

2) 北壁 (図22～29)

・北壁にもまた、南壁に対応するように、中ほどに凹状となっている部分がある。これが北側の出入口、つまり北門であったものと考えられる。南門の出入口に対応するように、凹状部分の両側、突き出した部分の内側の東側と西側に、それぞれ出入口があったものと考えられる。西側の出入口は明瞭に確認されるものの、東側の出入口はその痕跡が不明瞭となっている (図23)。

・北門の壁、つまり凹状部分の東西方向の壁は、南壁と平行しておらず、やや北東方向に、斜めに伸びている (図10、23)。

・北門の東側の壁は湾曲しているのに対し、西側の壁はほぼ直線的である。また、東側の壁は、西側の壁に比べて壁の幅がやや広い。

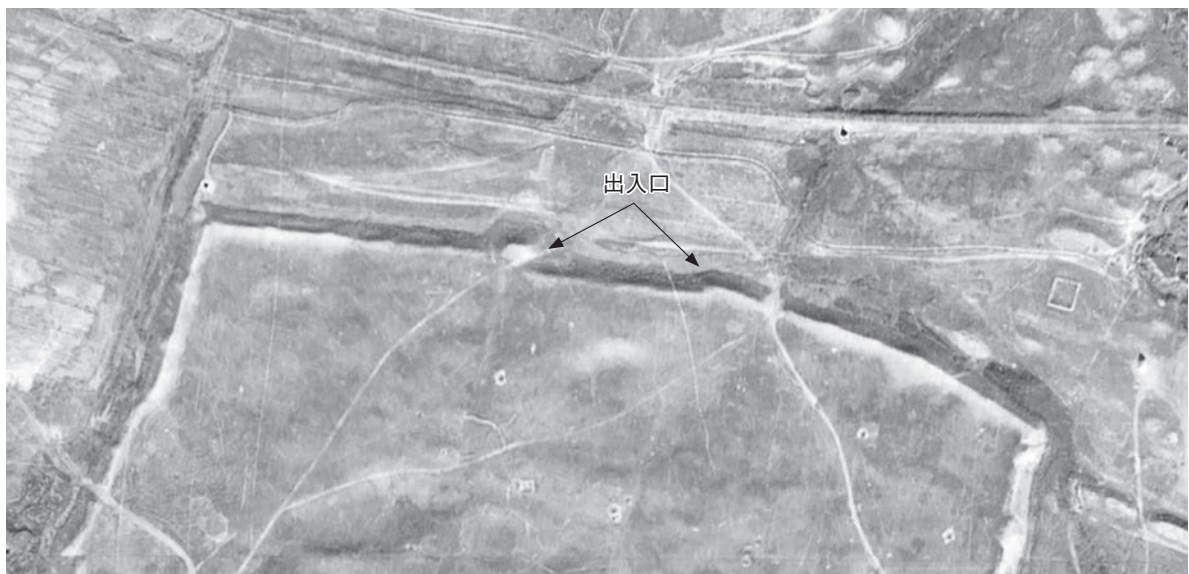


図 22 第1 シャフリスタンの北壁

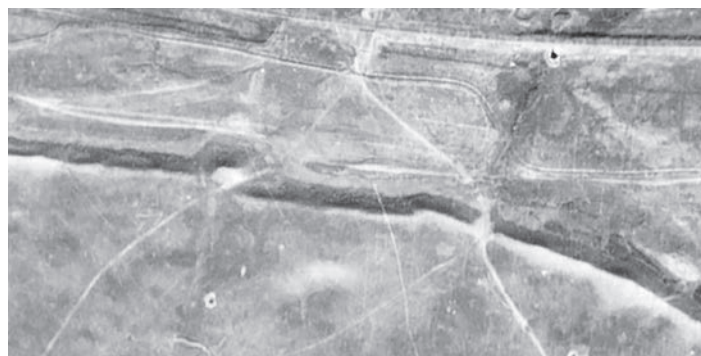


図 23 第1 シャフリスタンの北門



図 24 北壁：北門、北から



図 25 北壁：凹状部分、東から



図 26 北壁：北門の東側出入口、北西から



図 27 北壁：北門の西側出入口、北東から



図 28 北壁：東側部分、北東角から



図 29 北壁：西側部分、北西角から

3) 東壁と西壁 (図30~36)

- ・東壁は直線的である。それに対し、西壁は3本の壁が互い違いに組み合わせられているような構造となっている。
- ・西壁の真ん中の壁のラインがやや外側にはみ出していることから、その両端にそれぞれ出入口があっ

た可能性がある。図12によれば、街路状に窪んだライン、つまり東西方向の街路が、西壁の南側の出入口から東壁まで伸びている。その一方で、東壁には出入口の痕跡は確認されない。

- ・東壁と西壁に比べると、東壁の方が西壁よりも壁の幅が広い。

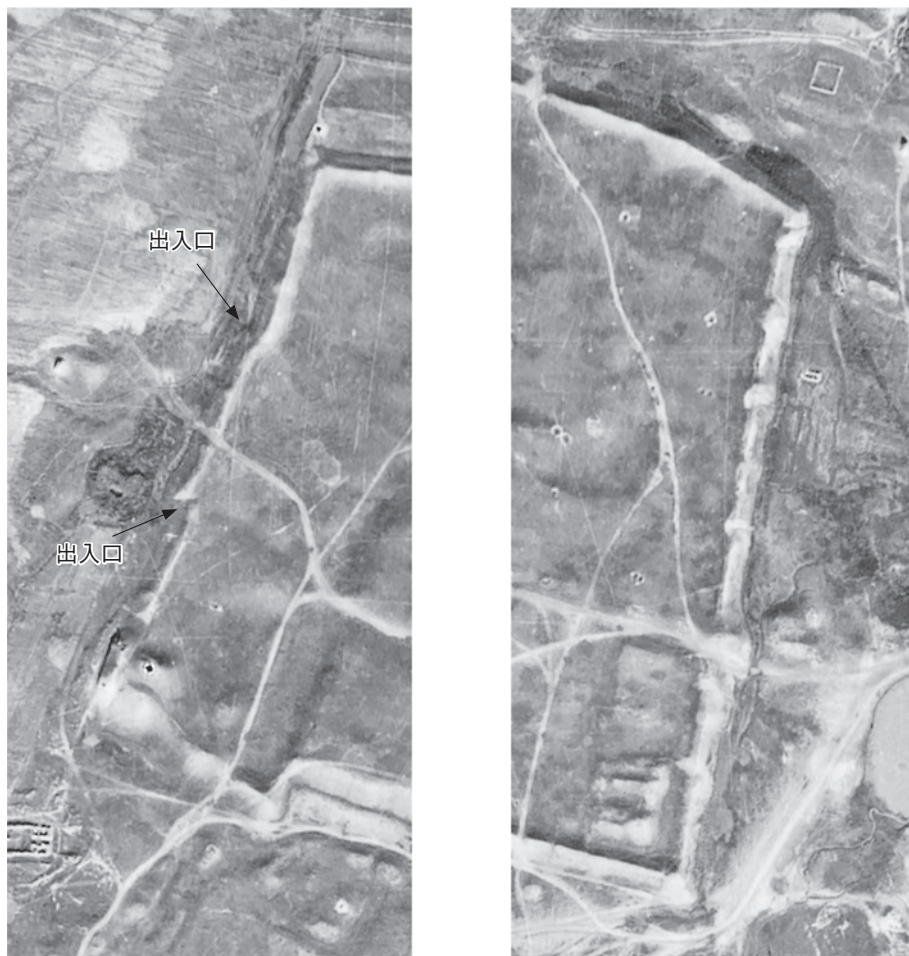


図 30 第1シャフリスタンの西壁 (左) と東壁 (右)



図 31 東壁、南東角から



図 32 東壁、北東角から



図 33 西壁、南西角から



図 34 西壁、北西角から



図 35 西壁：出入口（南側）、南から



図 36 西壁：出入口（北側）、北から

4) シャフリスタン1aの位置 (図37～39)

シャフリスタン1の南側部分、中央からやや西寄りにかけては、周囲よりも比高が高い、方形の区域が存在している (以下「シャフリスタン1a」とする。図2)。シャフリスタン1aは、シャフリスタン1の範囲内における主たる街区であったものと考えられるが、⁷⁾実際のところ、その機能は明らかとなっていない。

・シャフリスタン1aの西側半分については、西壁および北西側の壁の形状が明瞭であるにも関わらず、東側および北東側については緩やかな傾斜となっており、壁の痕跡が不明瞭である。

・東西方向の対称性という点からみれば、シャフリスタン1aはやや西寄りに位置している。

以上の点によれば、一見すると線対称であるかのようなシャフリスタン1の平面プランは、いくつかの点で非線対称となっていることが理解される。

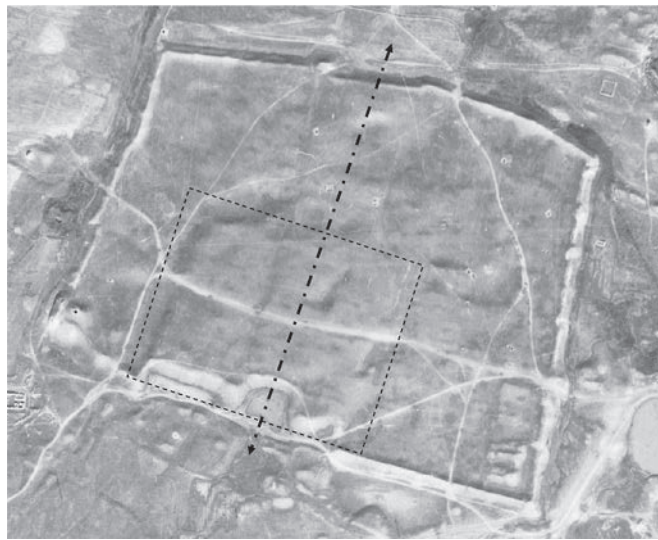


図 37 シャフリスタン 1a (点線で囲まれた部分)



図 38 シャフリスタン 1a、北東から



図 39 シャフリスタン 1a、北西から

Ⅲ．初期の都市の平面プランとその変化

「シャフリスタン1の平面プランにおけるこのような特徴は、シャフリスタン2、つまり碎葉鎮城の建設にともなう、もともとのシャフリスタン1の東側半分が改築されたことによる」という仮説の立証を進める上で重要な点となるのは、現在残されているシャフリスタン1の平面プランおよび内部構造が、ソグド人が5～6世紀頃に建設したとされるスイヤブ、つまりアク・ベシム遺跡の当初の平面プランがどこに残されているのかということである。

図40a～cは、現在残っている平面プラン（図40a）および当初のシャフリスタン1の平面プランがどこに残されているかを想定して作成した2つの平面プラン（図40b、図40c）を示したものである。図40bおよび図40cは、東側（図40b）もしくは西側（図40c）に当初の平面プランの痕跡が残されていると想定し、東側半分あるいは西側半분을線対称として折り返すようにして作成した平面プランとなる。

- ・図40a：現在残っている平面プラン
- ・図40b：東側半分に当初の平面プランが残されているとした場合の、想定される当初のシャフリスタン1の平面プラン
- ・図40c：西側半分に当初の平面プランが残されているとした場合の、想定される当初のシャフリスタン1の平面プラン

図40aと比較すれば明らかであるが、図40bでは想定される西壁の位置は、現在残されている西壁のさらに西側になってしまうことから、西壁を東側に移動させ、縮小という改築を行ったことになる。その一方で、図40cでは、図40bとは逆に、もともと存在していた東壁をさらに東側に移し、東側を拡張したということになる。

都市の平面プランがもともと、図40aのように、現在みられるような非線対称形であったと考えることももちろん可能である。しかしながら、南壁の東側と西側の形状や幅が全く異なること、同じく東壁と西壁の形状や幅もまた異なることからすれば、いずれかの時期にシャフリスタン1の平面プランが大きく変化したと考えるほうが妥当である。

ここでは、シャフリスタン1の東側には、唐軍によって建設されたシャフリスタン2、つまり碎葉鎮城が存在していることから、その建設が当初のシャ

フリスタン1の平面プランに影響を与え、東側が改築された、つまり、西側半分に当初の平面プラン（図40c）が残されていると仮定し、論を進めることとする。

図41a～cは、現在の平面プラン（図41a）で観察される、シャフリスタン1の北側の出入口と南側の出入口の中心、つまり東側と西側に位置する門の中心を結ぶ線を東西方向の線対称の軸とし、西側の平面プランを折り返して重ねたもの（図41b）、この2つの平面プランを重ねたもの（図41c）である。このようにしてみると、以下の点が指摘できる。

1) 北壁の東側部分および北壁の凹状部分（北門）の東側部分

- ・想定される北壁の東側部分の位置は、現在の北壁の東側部分の内側に位置することとなる。また、壁の方向についても、現在の北東壁と比べて、約12度、南側に振れている。
- ・想定される壁のラインは直線的であるのに対し、現在の壁のラインはやや弧を描くようになっている
- ・現在残されている凹状部分の東側の張り出し部分については、西側の張り出し部分に比べ、やや北寄りに位置し、また張り出しの形状がやや不明瞭になっている。

2) 東壁

- ・想定される東壁の位置は、現在の東壁の内側に位置することになり、南東角も現在の壁の内側に位置することとなる。壁の方向については、現在の東壁と比べて、約10度、南西方向に振れている
- ・想定される東壁の地点には、現在、東方キリスト教会址が存在していることになる。シャフリスタン1の東壁の南側部分（AKB-16区）の発掘調査（2017年）によれば、現在のシャフリスタン1の壁の基礎の下層では陸水成堆積土層が確認されている（『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』, pp. 185-188）。さらには東方キリスト教会址の東側（AKB-8区）における発掘調査（2023年）では、東方キリスト教会址の東壁の基礎の下層でも同じく陸水成堆積土層が確認されている（『アク・ベシム（スイヤブ）2022・2023』, p. 68）。壁の基礎の下層で確認された土層は陸水成堆積土層であることから、この地点は壁の外側にあたり、かつてはここに水路が存在していたと考えられる。それぞれの壁の基礎の下層で確

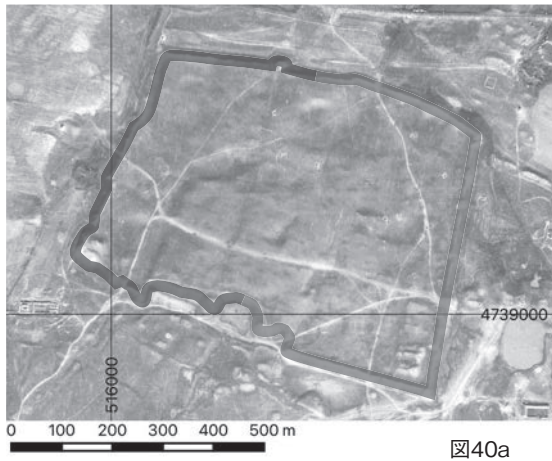


図40a

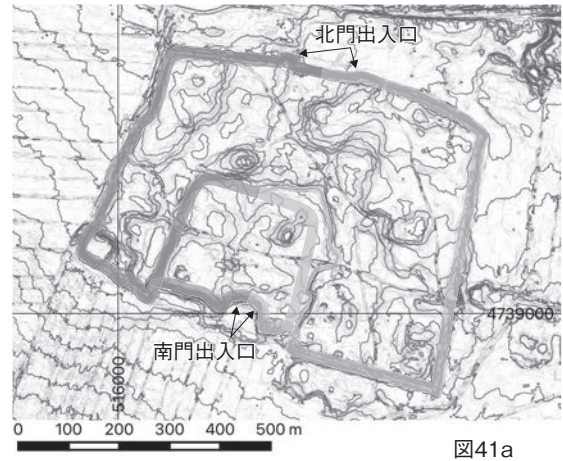


図41a

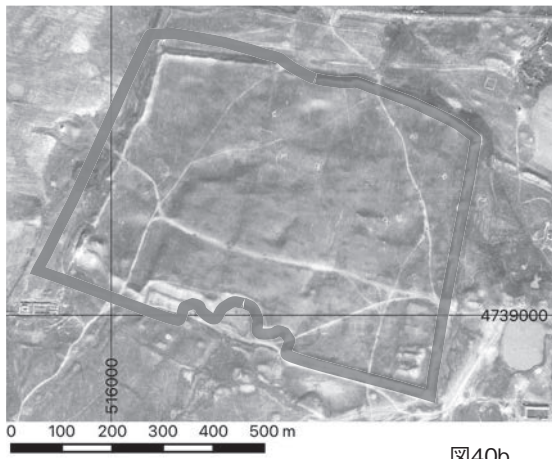


図40b

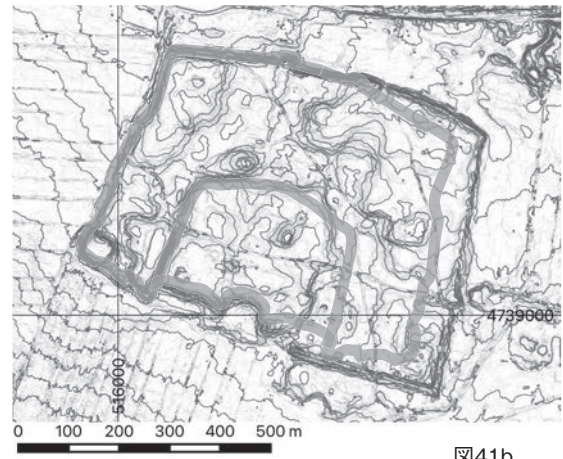


図41b

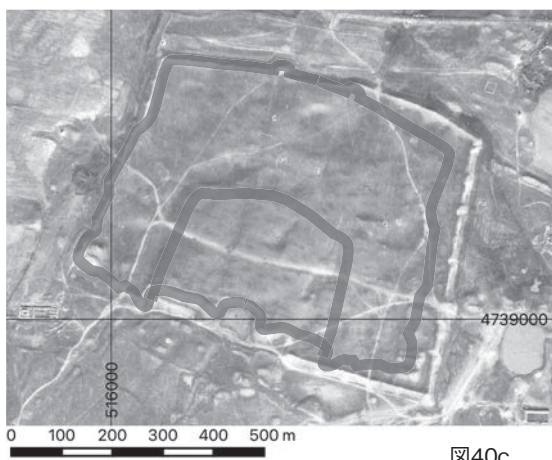


図40c

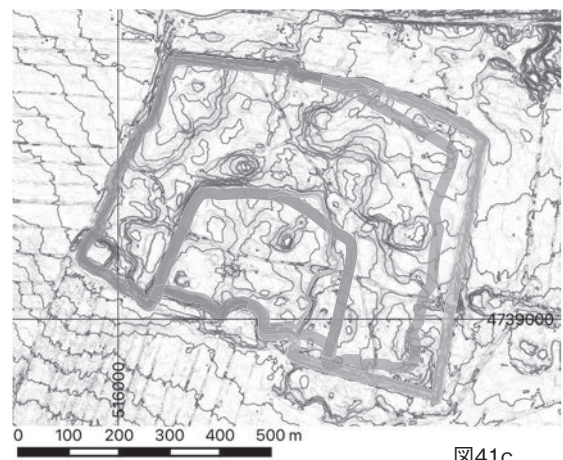


図41c

図 40 第1 シャフリスタンの平面プランの想定図

図 41 第シャフリスタンの平面プランの想定図 1

認められている陸水成堆積土層はこの水路に溜まった土である可能性が高い。なお、これらの発掘調査の成果については後述を参照されたい。

・壁のラインについては、現在残されている東壁は直線的である。

3) 南壁の東側部分

・想定されるシャフリスタン1の南東角は、現在の南東角よりも内側に位置する。

・想定される壁は屈曲した形状のものであるが、現在の南壁は、凹状部分の東側張り出し部分の東側に残る削り込み部分を除き、直線的となっている。

・壁のラインがもともとあったと想定される張り出し部分の頂点に対応していることから、全体として、壁の位置がやや南側になっている。

4) シャフリスタン1a

・想定されるシャフリスタン1aの形状は長方形をなすが、現状では正方形に近い形状をなしている。

・現状のシャフリスタン1aの東辺は南壁の出入口部分、つまり南門の東側の張り出し部分の東側に残る削り込み部分に対応している。

・シャフリスタン1のDEM（数値標高モデル）によれば（図42）、シャフリスタン1aの西壁および西側の境界は明瞭である。同じように、東側と北東側の境界もまた明確であるが、西側とは異なり、直線的なラインとはなっていない。その一方で、図42に示した通り、現在の東側の境界線のさらに東側には、不明瞭ながらも、比高差の違いを示す境界線が確認できる。この比高がやや高い部分は、線対称形として西側半分を折り返した場合の想定されるシャフリスタン1aの東側境界線と対応しており、全体として長方形をなしている。

以上の分析に基づけば、以下のような仮説を立てることができる。

・シャフリスタン1の当初の平面プランは西側半分に残されているとすれば、東側半分は後代になって改変されたものであり、想定される当初の平面プランは図40cおよび図41bに示した通りである。

・東壁はシャフリスタン2、つまり碎葉鎮城の西壁と共通していることから、これらの改変は碎葉鎮城の建設と深く関連している。

IV. 発掘調査の成果による仮説の検証

上述の仮説を検証するために、AKB-8区（2023年）、AKB-16区（2017年）、AKB-17区（2017年）、AKB-19区（2019年）で発掘調査を行なった。それぞれの成果を時系列に沿って記述する。

IV-1. AKB-16区（『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』pp. 185-188）

AKB-16区は、シャフリスタン1の東壁（シャフリスタン2の西壁）の南東隅寄り、東方（ネストリウス派）キリスト教会址の東側に位置する壁である（図3）。この地点はかつて東方キリスト教会址の調査の際に部分的に発掘調査が行われた場所とされるが、報告書には記述がない。2017年には、この部分的に発掘された地点の発掘を継続し、壁の半分の断割りを行った（図43～46）⁸⁾。

この成果に加え、2023年に同じ地点で行われたAKB-8区（Tr.03/AKB8/23）の調査で得られた新たな調査の成果（詳細については後述参照）を踏まえると、現時点におけるAKB-16区の調査で得られた知見は以下の通りとなる。

・シャフリスタン1の東壁、つまりシャフリスタン2（＝碎葉鎮城）の西壁は、版築工法で構築されており、唐軍による碎葉鎮城の構築にあわせてこの壁が構築された。

・積み重ねられた土層に含まれている土の観察に基づけば、壁の西側、つまり壁の内側の陸水成堆積層を掘り込み、掘り上げた土を積み重ねている。

・壁の下層で確認された陸水成堆積層の存在は、この壁および東方キリスト教会址の東壁にかけての一带には、かつては水が流れる水路が存在していたことを示している。この水路は、シャフリスタン1のかつて存在していたと想定される「旧東壁」の東側（＝外側）に沿って流れていた可能性が高い。

・地滑り状の断層は過去における大規模な地震および壁の西側に存在していた壕（唐軍によって構築されたもの。かつての水路のルートが変更され、それによって干上がった水路の上に壁《シャフリスタン1の東壁＝シャフリスタン2の西壁》が構築された際に、壁の構築に必要な土をその西側部分から掘削したことによって登場した壕のこと。後述参照のこと。）の存在、地盤の脆弱性（陸水成堆積層）

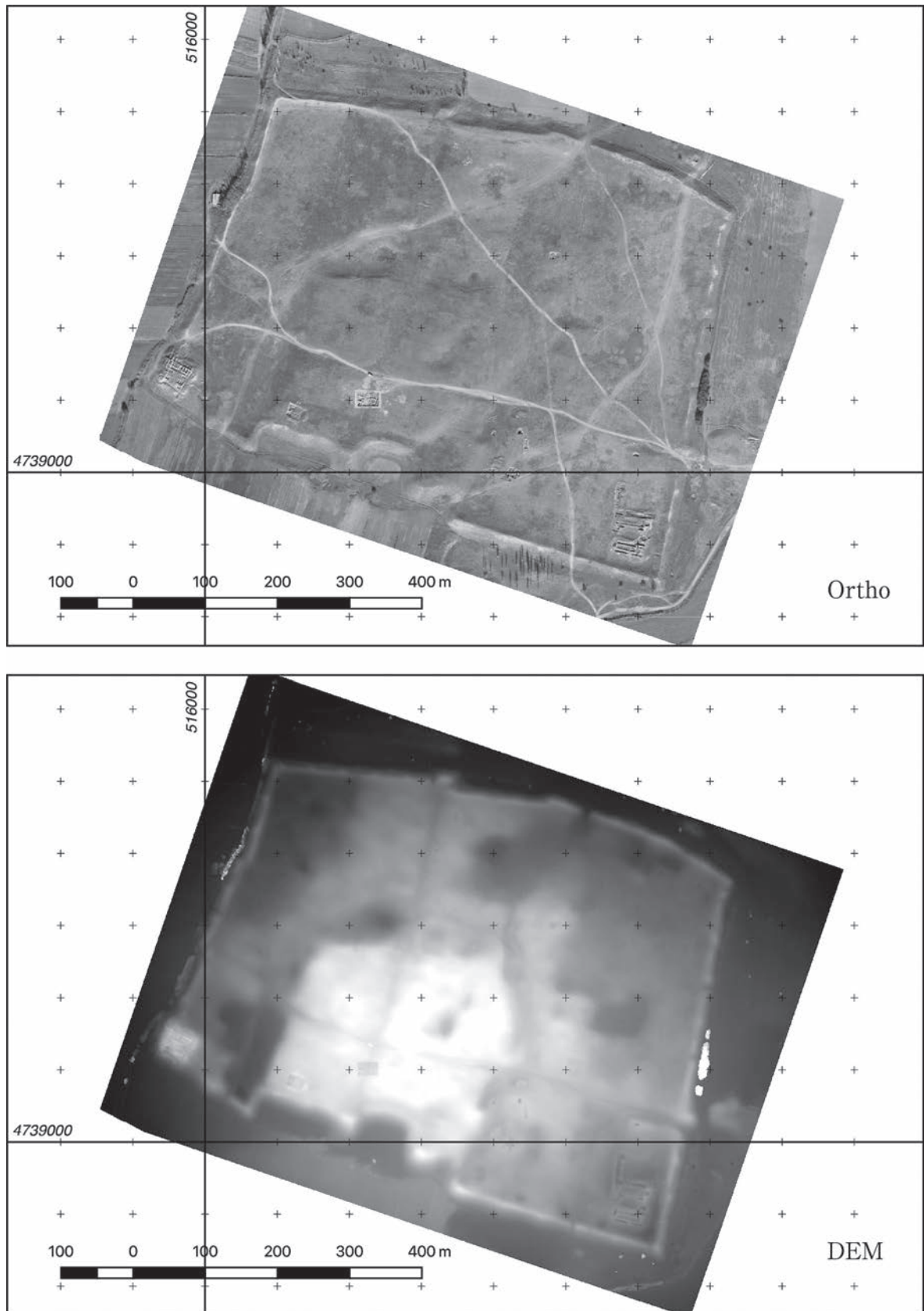


図 42 シャプリスタン 1 の DEM (数値標高モデル)



図 43 AKB-16 区の調査



図 44 壁の断面（AKB-16 区）

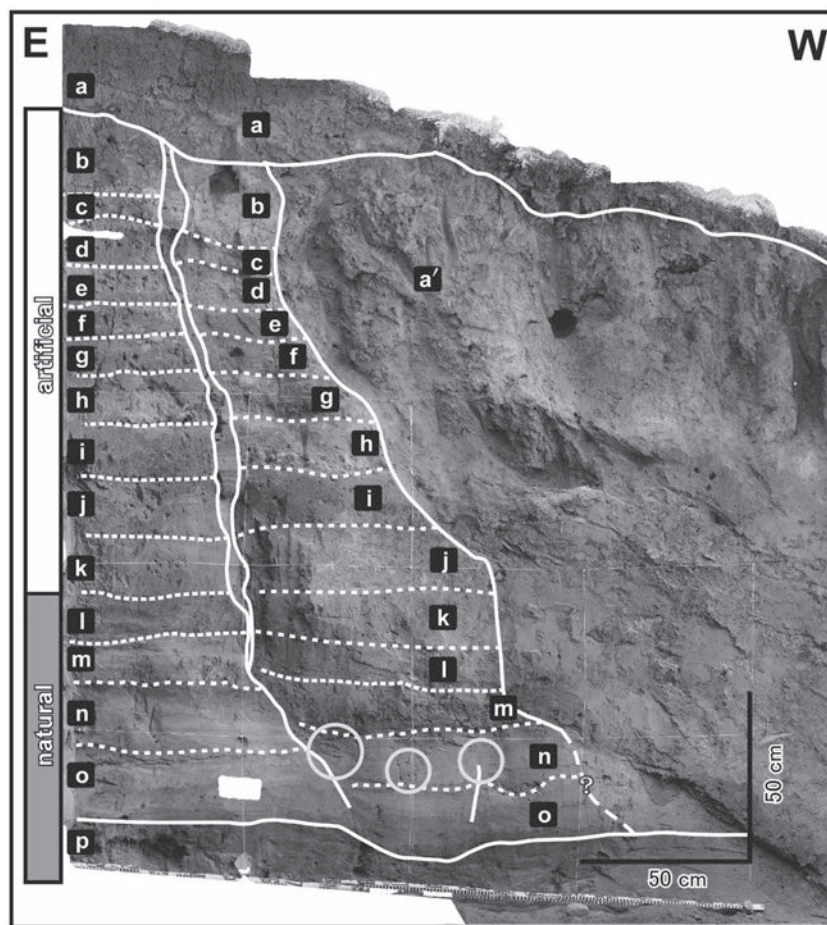


図 45 東壁の断面図（南側）AKB-16 区の調査 ○に構造の乱れ（アク・ベシム（スイヤブ）2018, p. 176, Fig. 6. 2）

に起因するものである。

この断層については、2018年に行われた佐藤らによる追加の調査によって（図45）、「この壁の変形をGeoarchaeologyの視点から復元を試み、変形の誘因が地震である可能性が高いという結論」が

得られている（『アク・ベシム（スイヤブ）2018』p. 174）。また、佐藤らの調査によれば、「調査地〔アク・ベシム遺跡〕から南に13kmの位置にはチュー川盆地と天山山脈を境する明瞭な活断層崖が東西方向に発達する。壁を変形させた地震は、この活断層との関連が高い」という結論も得られている（『アク・

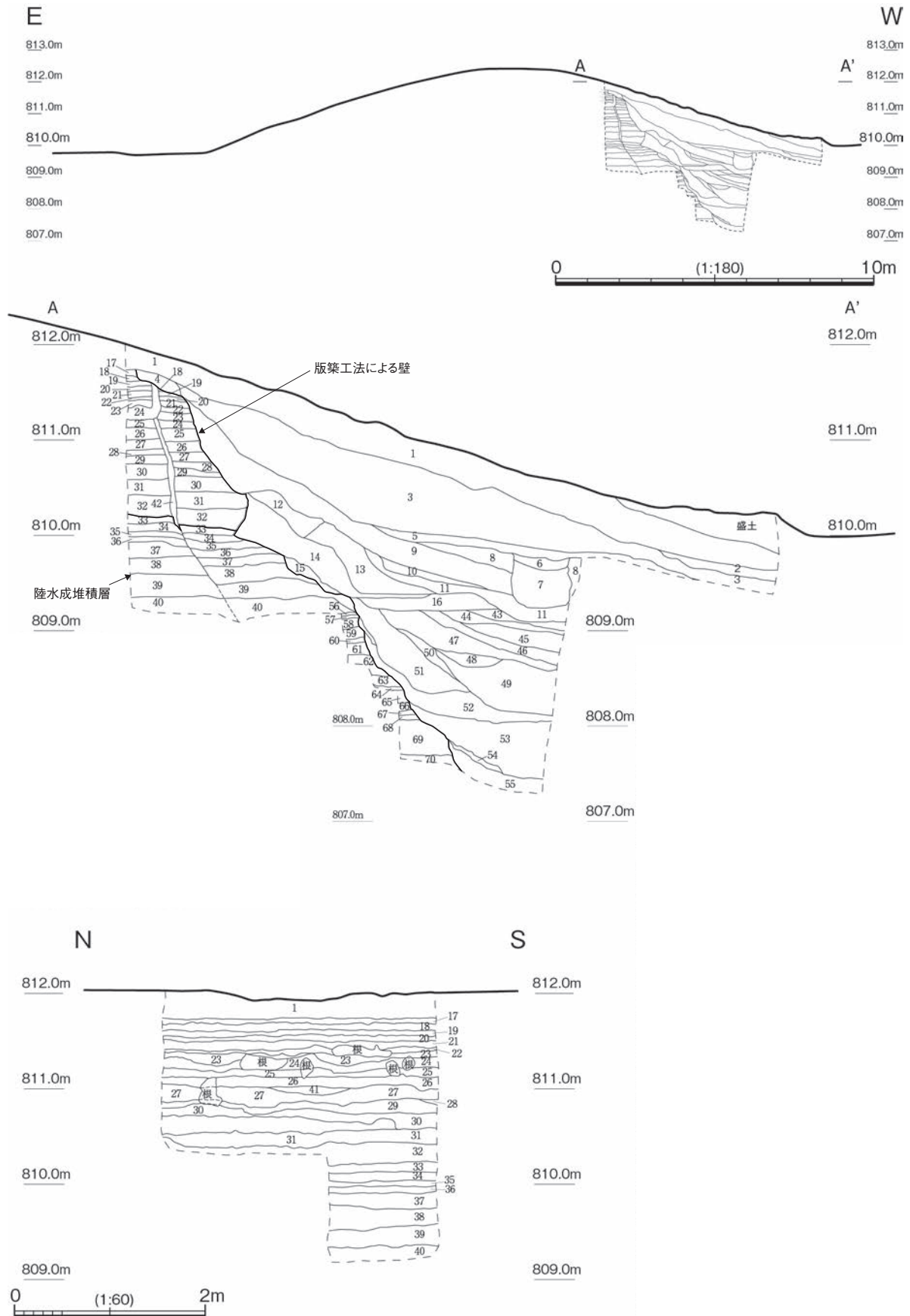


図 46 シャプリスタン 1 東壁（シャプリスタン 2 西壁）の断面図
（アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017, p. 186, Fig. 11.1 に追加）

ベシム（スイヤブ）2018』p.175。[]は筆者追加。

かつて、この活断層とそれに誘発された大地震が都市スイヤブ（アク・ベシム）の衰退と放棄の要因になった可能性もあるが、この点については今後の分析と調査が必要である。

IV-2. AKB-17区（『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』pp. 189-191）

AKB-17区は、シャフリスタン2の南門のやや東側に位置する（図3、図49）。この地点では、南壁の内側、つまり北側にある耕地に水を引くために、南壁に直交するように水路が掘削されていることから、この部分に調査区を設定した。

AKB-17区における調査の成果は以下の通りである（『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』p. 189）。

- ・壁の現状は、幅約14m、高さ約1.5mであるが、調査の結果、壁の幅は7.6m、高さ2mであった。なお、壁のもともとの高さは約3mであったと推定される（図47）。

- ・壁の断面の観察によれば、厚さ約10cmの土層が水平に約20層積み重なっている（図48、図50）。それゆえ、この壁は版築工法によって構築されたものであり、唐軍が碎葉鎮城を建設した際に構築した外壁であることが明らかである。



図 47 AKB-17 区
（アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017, p. 191, Fig. 12.2）



図 48 AKB-17 区：壁の断面（アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017, p. 191, Fig. 12.6）



図 49 AKB-17 区、西から（アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017, p. 191, Fig. 12.3）



図50 AKB-17区：壁の断面（阿克・ベシム（スィヤブ）2016・2017, p. 190, Fig. 12.1）

IV-3. AKB-19区（『アク・ベシム（スイヤブ）2019』pp. 119-124）

AKB-19区は、シャフリスタン1の南壁の東側部分に位置し、東方キリスト教会址（AKB-8区）の南西側にあたる。調査の実施時点（2019年）では、「当該地点は、ソグド人が構築した壁が存在していた地点であり、また唐が碎葉鎮城を建設した際に壁の改築が想定される地点でもある」とした地点であった（『アク・ベシム（スイヤブ）2019』p. 119）。

発掘された壁の断面観察によれば、壁は中央部に日干しレンガ、南側にパフサ・ブロック（練り土のブロック）、北側には版築工法で土が積み上げられている（図52～54）。調査の時点では、壁のこの構造と異なる工法の組み合わせに関しては、「ソグド人が築いた日干しレンガとパフサ・ブロックの壁を、中国

人が版築工法で補強した」とものと推定され、「この地点の壁は、シャフリスタン2、つまり碎葉鎮城の壁の建設にともない、あわせて改築されたと考えられることから、唐代の修築であると考えられる」と結論付けた（『アク・ベシム（スイヤブ）2019』p. 120）。

その一方で、同地点での調査では、調査区南側のパフサ・ブロック壁周辺から方孔銭が出土している（図54）。この方孔銭については、その後の調査で、蘇祿によって715～738年頃に発行されたものであると推定されている。この方孔銭の存在は、「ソグド人が構築した壁」という想定、つまり5～6世紀に築かれた壁というものとは矛盾するものであり、その理由は解決できないまま、残されていた。

しかしながら、後述するとおり、AKB-8区におけ



図 51 AKB-19 区、東から（アク・ベシム（スイヤブ）2019, p. 122, Fig. 5.2）



図 52 AKB-19 区、東から（アク・ベシム（スイヤブ）2019, p. 122, Fig. 5.3）

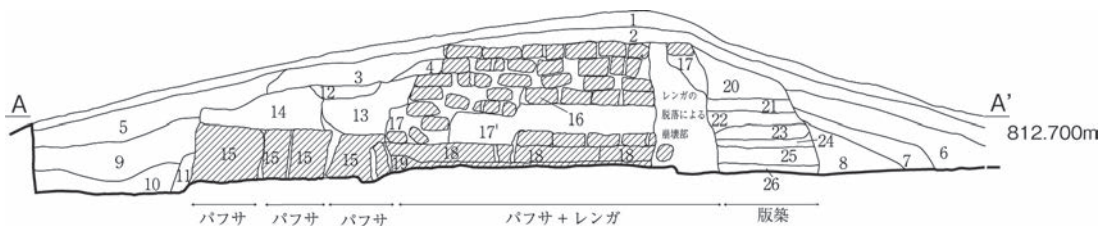


図 53 AKB-19 区、東から（アク・ベシム（スイヤブ）2019, p. 121, Fig. 5.3）

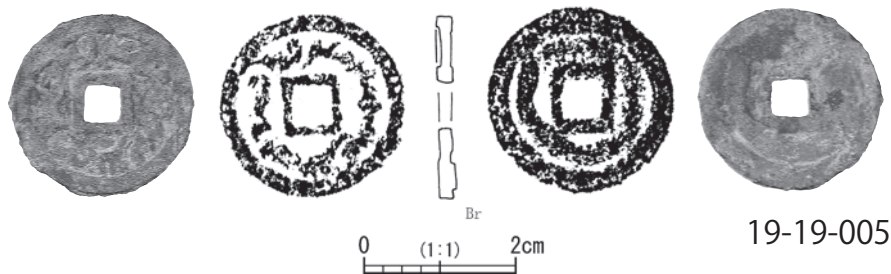


図 54 AKB-19 区出土のコイン（アク・ベシム（スイヤブ）2019, p. 123, Fig. 5.5）

る発掘調査 (Tr.03/AKB8/23) によって、「AKB-19 区で発掘調査を行なった壁は唐軍が構築した『コの字型』の壁の一部であり、唐軍によって版築技法で築かれた壁が、おそらく地震等で一部崩落したため、その部分を日干しレンガとパフサ・ブロックで補修したものである。また、その補修の時期については、出土した突騎施コインに基づき、早くても8世紀の前半以降のことであった可能性が高い」と結論付けることが可能となった。

報告によれば、「日干しレンガの下層には、厚さ10～12cm以上の固く締まったパフサが層状に確認された」と記されていることから(『アク・ベシム(スイヤブ) 2019』 p. 119)、この層が版築工法による土層であった可能性も高い。

IV-4. AKB-8区(『アク・ベシム(スイヤブ) 2022・2023』 pp. 67-158)

2023年の調査でAKB-8区に設定された調査区(Tr.03/AKB8/23)は、2017年に調査を行なったAKB-16区と東方キリスト教会址の東壁を東西に結ぶ長さ22m、幅1.5mのトレンチである(図55)。

Tr.03/AKB8/23(図56)における調査の成果は以下の通りである(『アク・ベシム(スイヤブ) 2022・

2023』 pp. 67-68)。

- ・東方キリスト教会址の東壁は陸水成堆積層を整地し、その上に直接パフサ・ブロック(練り土ブロック)を置いて基礎としている(図57、58)。この陸水成堆積層はシャフリスタン1東壁の基礎の下層でも確認されており、土層の観察では同じものと考えられる。また、この陸水成堆積層の上面の高さは東方キリスト教会址東壁では810.2m、シャフリスタン1の東壁では810.2mで同レベルである。

- ・東方キリスト教会址の東壁とシャフリスタン1の東壁の間には、幅約20m、深さ2～3mの底面がやや平らな壕が存在している(図59～61)。東方キリスト教会址の東壁の基礎の下層とシャフリスタン1東壁の基礎の下層ではともに陸水成堆積層が確認されていることから、この陸水成堆積層の中ほどを掘削して壕を構築したことになる。

- ・壕はトレンチ内で確認されただけなので、壕の広がりや規模、平面的な形態については明らかではないものの、現状の地形から推定すると、壕はシャフリスタン1東壁の内側、東壁に沿って南北に長く延びると想定される。

- ・この壕は、現在残されているシャフリスタン1



図55 AKB-8区 Tr.03/AKB8/23 全景、南から(アク・ベシム(スイヤブ) 2022・2023, p. 82, Fig. 5.7)

Tr.03

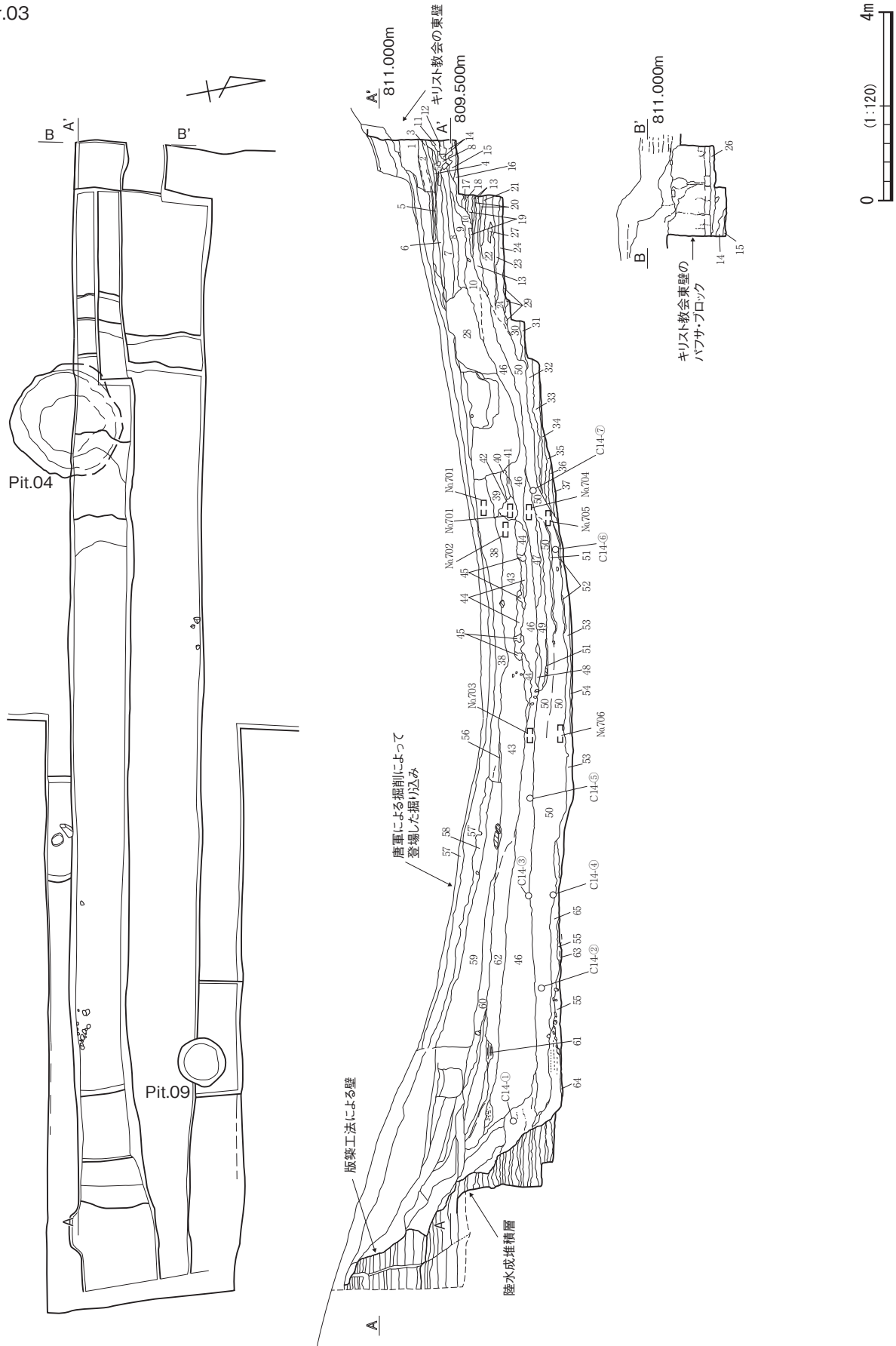


図 56 AKB-8 区 Tr.03/AKB8/23 (アク・ベシム (スィヤブ) 2022・2023, p. 76, Fig. Fig.5.3-1 に追加)

の東壁＝シャフリスタン2の西壁であることから、シャフリスタン2側からみれば、この壕は西壁の西側、つまり西壁の外側に位置していることになる。

・シャフリスタン1の東壁は、唐軍によって版築工法を用いて構築されていることが判明していることから、壕はシャフリスタン2（碎葉鎮城）の外壕として掘削され、その掘削土そのものが壁（シャフリスタン2西壁）の構築に用いられた。それゆえ、壕と壁は同時期に構築されたものと考えられる。

・壕内から出土した獣骨の放射性炭素年代測定によれば、この壕が存在していたのは、7世紀後半である。

・壕の土層断面の観察によれば、この壕は人為的かつ意図的に、短期間で埋め戻されたものと推定される。この埋め戻しに用いられた土は、現在のシャフリスタン1の東壁（＝シャフリスタン2の西壁）の西側に存在していたと推定されるシャフリスタン1の旧東壁を壊すことで調達された可能性がある。なお、東方キリスト教会址の東壁が位置する敷地は、2本の壁の間にあった壕が埋め戻され、整地された地点ということになる

・この想定が正しければ、碎葉鎮城の建設にともない、シャフリスタン1の旧東壁の東側に新たに碎葉鎮城の西壁が構築され、少なくとも碎葉鎮城が唐軍の軍事拠点として機能していた時期（7世紀末～8世紀初め）には、2本の壁が並行して存在していたことになる。

・この2本の壁のうち、東側に位置していた壁（＝シャフリスタン2＝碎葉鎮城の西壁）が残されることで、現在のシャフリスタン1の東壁となった。詳細は後述するが、現在のシャフリスタン1の東半分の壁の形状に基づけば、この東側にあった壁は、もともとのソグド人の街（＝旧シャフリスタン1）の東側半分を囲い込むために構築された「コの字形」の壁（西壁）の一部であると推定される。

・壕が掘削された時期は、碎葉鎮城が建設され、軍事拠点として機能していた時期であったことから、679年以降の早い段階のことであったと考えられる。また、壕が埋められた時期は早くとも唐軍が完全に撤退した719年以降（齊藤 2023, p. 32）のことであったと想定される。

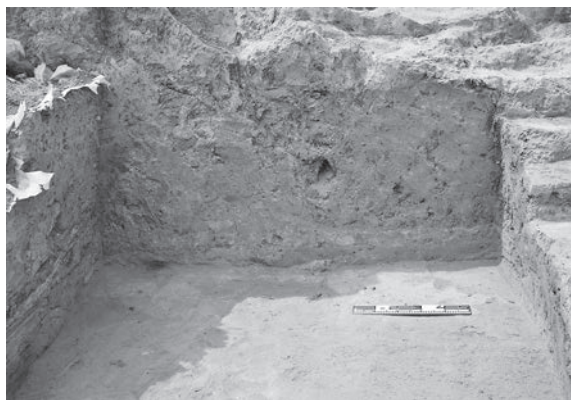


図 57 AKB-8 区 Tr.03/AKB8/23、東方キリスト教会址の東壁、東から（阿克・ベシム（スイヤブ）2022・2023, p. 88, Fig. 5.52)



図 58 AKB-8 区 Tr.03/AKB8/23、東方キリスト教会址の東壁、北から（阿克・ベシム（スイヤブ）2022・2023, p. 88, Fig. 5.42)



図 59 AKB-8 区 Tr.03/AKB8/23、東から（アク・ベシム（スイヤブ）2022・2023, p. 90, Fig.5.56)



図 60 AKB-8 区 Tr.03/AKB8/23 全景（アク・ベシム（スイヤブ）2022・2023, p. 88, Fig.5.43)



図 61 AKB-8 区 Tr.03/AKB8/23、西から（アク・ベシム（スイヤブ）2022・2023, p. 89, Fig.5.54)

V. 唐軍が建設した「コの字型」の壁とその位置

図62は、図63の空中写真を基に、西側半分に当初の平面プランが残されていると仮定し、南門と北門の中心線を線対称の対称軸とし、西側半分を反転させたものと現在残されているシャフリスタン1の壁を重ねたものである。これを見ると、想定されるシャフリスタン1の旧東壁は、この東側に構築された「コの字形」の壁に取り囲まれている、つまり、シャフリスタン1の東側全体がこの「コの字形」の壁によって取り囲まれるようになっていることが理解される。別の言い方をすれば、この「コの字形」の壁は、もともとのソグド人の街（＝シャフリスタン1）の東側半分を囲い込み、ソグド人の街と碎葉鎮城を明確に区画し、分離させるために唐軍が構築したものであるといえる。

また、「コの字形」の壁を構築する際にその西側、つまりシャフリスタン1の旧東壁の東側を掘削する

ことで、壁（＝シャフリスタン2の西壁）の構築に必要な土を調達するとともに、その2本の壁の間に壕を登場させることで、「分離」という目的を確かなものにしたと考えられる。

また、現在、シャフリスタン1への出入口として使われている地点を除けば、出入口の痕跡は確認されないことから（図64）、碎葉鎮城の西壁には門がなかったものと考えられる。¹⁰⁾

その後、唐軍の撤退後、あまり時を経ずして、この地の支配者がソグド人の街の東壁（シャフリスタン1の旧東壁）を壊し、2つの壁（シャフリスタン1の旧東壁と「コの字形」の壁）の間にあった壕を埋めることで、現在見られるような状況になったものと考えられる。

なお、上述した通り、南壁の東側部分の前面（南側）は周囲より一段低い窪地になっているが、この窪地は、この地点の壁を構築するために土を採掘したことで生じた窪地であると考えられる。¹¹⁾



図 62 「コの字形」の壁の形状とその位置



図 63 アク・ベシム遺跡シャフリスタン 1・2 全体写真（1966 年撮影の空中写真）



図 64 アク・ベシム遺跡第 1 シャフリスタン の全体写真（1966 年撮影の空中写真）

Ⅵ. 「コの字形」の壁とシャフリスタン2の外周壁との関係

シャフリスタン2は周囲を外壁で囲まれているが、この「コの字形」の壁は、その他の外周壁と比べてより新しい時期に構築されたものと推測される。その理由は以下の通りである。説明が煩雑になることを避けるために、ここではそれぞれの壁に便宜上、名称をつけた（図65）。

ここで注目されるのは、シャフリスタン2の北壁と現在のシャフリスタン1の北東角のずれである。図65に見られるように、シャフリスタン2の北壁の延長線は、シャフリスタン1の北東角と重なることはなく、北東角のやや南側で東壁と交差することとなる。

図62にあるように当初の平面プランにおけるシャフリスタン1の北東角は、現存の角よりもやや南西側に位置していたと想定されることから、シャフリスタン2の北壁の延長線上に位置することとなる。それゆえ、シャフリスタン2の北壁は当初のシャフ

リスタン1の北東角にあわせて構築されたものと考えられる。

つまり、シャフリスタン2の北壁が構築された時には、まだ「コの字形」の壁は存在せず、依然として、シャフリスタン1の旧東壁が存在しており、それがシャフリスタン2の西壁（旧西壁）となっていたものと推測される（図66参照）。

おそらく、碎葉鎮城であるシャフリスタン2を建設する際には、まずはもともと存在していたシャフリスタン1の東壁を利用して周囲を壁で囲み、いつの時期かは不明であるが、その後、「コの字形」の壁を新たに構築したのであろう。それゆえ、結果的に、現在のシャフリスタン1の北東角とシャフリスタン2の北壁の延長線が重ならなくなった。

上述した通り、「コの字形」の壁の構築の目的は、もともとのソグド人の街（＝シャフリスタン1）の東側半分を囲い込み、ソグド人の街と碎葉鎮城を明確に区画し、分離させることにあったと推測される。碎葉鎮城が679年に王方翼によって建設されたとすれば、「コの字形」の壁の構築時期として考え



図 65 アク・ベシム遺跡シャフリスタン2と壁の名称

うるのは、692～693年に唐軍が突騎施と結んで吐蕃に勝利を収め、碎葉鎮が復活した時であるが（柿沼 2019, p. 47）、それを裏付ける証拠はない。

VII. 碎葉鎮城の建設とシャフリスタン1の平面プランの変遷

ここでは、これまで述べてきた平面プランの非線対称の分析や発掘調査の成果、そして1966年撮影の空中写真の分析に基づいて、碎葉鎮城の建設およびそれにともなうシャフリスタン1の平面プランの変遷について考察する。

図66～図71は、シャフリスタン2（碎葉鎮城）の建築およびそれにともなうシャフリスタン1の平面プランの変化を第I～VI期に分けて示したものである。それぞれの図の「a」は1966年の空中写真を下図として形状を重ねたもの、「b」は形状のみを示

したものである。なお、図72は図66～図71の「b」を時系列的に並べたものである。

1) 第I期（図66a、b）

碎葉鎮城が建設される以前の状況で、線対称形をなす当初のシャフリスタン1の平面プランが維持されている時期にあたる。

図66aおよび図66bに示したように、この時期、南東から流れてくる水路1は、途中から方向を変え、シャフリスタン1の旧南東角に向かい、その後、旧東壁に沿って北へと流れていた。もともとこの地点シャフリスタン1の旧東壁の外側にあたり、水の流¹²⁾れが緩やかな水路もしくは湿地帯であった可能性が高い。この水の流¹²⁾れの痕跡が、現在のシャフリスタン1東壁（＝シャフリスタン2西壁）の基礎の下層、そして東方キリスト教会址の東壁の基礎の下層で確認されている陸水成堆積層である。



図 66a

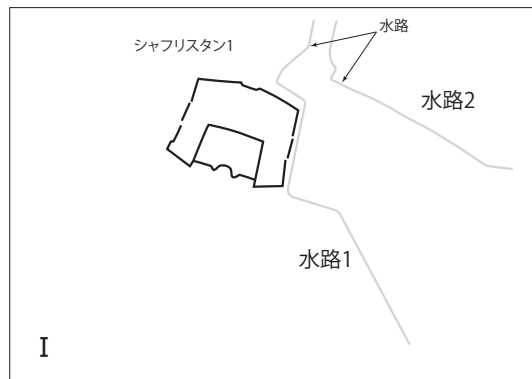


図 66b

図 66 第I期の平面プラン

2) 第II期（図67a、b）

この時期は、シャフリスタン1の東側に碎葉鎮城が建設された時期にあたる。当初の碎葉鎮城では、シャフリスタン1の旧東壁を西壁として利用したうえで、北壁、南壁、南西壁を構築して外周壁としていた。

この外周壁が不整五角形をしているのは、碎葉鎮城建設以前から存在していた水路（水路1、水路2）によって外周壁の位置や方向が制限されたためであろう。図67aを見ると、少なくとも北壁と南西壁は水路に並行していることがわかる。北壁は直線ではなく、湾曲しており、水路2のカーブに沿っているのみならず、一定の距離を取って構築されているこ

とが理解できる。また、南西壁も同様であり、水路1の流路に沿って、一定の距離を取って、水路1の南西側に構築されている。南西壁は途中から方向を変えて、西へと伸びているが（南西壁2）、これはその当時、水路がシャフリスタン1の南東角に向かって流れていたためであると推測される。図67では、南西壁3を点線で図示したが、第III期の図（図68）にあるように、南西壁2の西端からシャフリスタン1の旧南東角に向かって伸びていたものと考えられる。このように、碎葉鎮城の外周壁の一部は、それ以前から存在していた水路と並行し、かつ一定の距離を取って構築されていることとなるが、その理由は不明である。

水路1は、その後、第Ⅲ期の図に見られるように、唐軍によってこの地点に流れ込む水路が堰き止められ、流路が変更されて南東から北西へとまっすぐ流れるようになり、それにあわせて貯水池が造られることとなった。¹³⁾ また、それにともなって、シャフリスタン1の旧東壁沿いの水路が干上がることとな

る。

なお、碎葉鎮城をシャフリスタン1の東側に建設したのは、南東から流れてくる水路を外周壁内に取り込み、重要かつ貴重な水資源を確保するためであったものと推測される。



図 67a

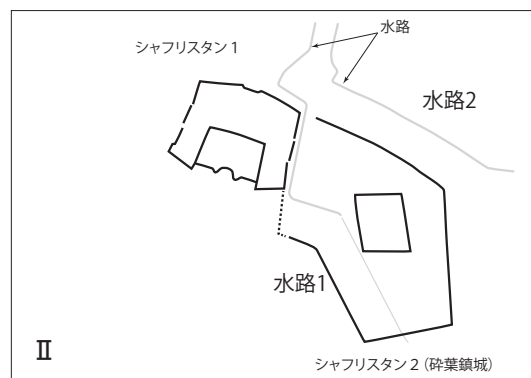


図 67b

図 67 第Ⅱ期の平面プラン

3) 第Ⅲ期 (図68a、b)

第Ⅲ期は、シャフリスタン1の旧東壁の東側、つまりシャフリスタン2の西側に「コの字形」の壁、そして壕が構築された時期にあたる。上述したように、「コの字形」の壁が構築される以前に水路1の流路が変更されたことによって、シャフリスタン1の旧東壁の東側が、いわゆる「陸」となっていたと想定される。「コの字形」の壁はこの地点に構築された。なお、ここで指摘しておくべき点は、唐軍は、陸水成堆積土という脆弱な地盤の上に、敢えて壁を構築したという点である。水路を堰き止め、干拓したと

しても、陸水成堆積土層は脆弱であり、高くて厚い壁を支えることが難しい地盤である。唐軍、もしくは唐軍の工人はそれを承知していたにも関わらず、敢えてこの地点に壁を構築したということになる。実際のところ、上述したように、かつて起こった地震によって壁に亀裂が生じたという結論も得られている。高い土木技術を持っていたと推測される唐軍の工人がこの地点を選んで壁を構築した理由は定かではない。

さて、この「コの字形」の北側部分の西端はシャフリスタン1の北門の東側の出入口までそして、南



図 68a

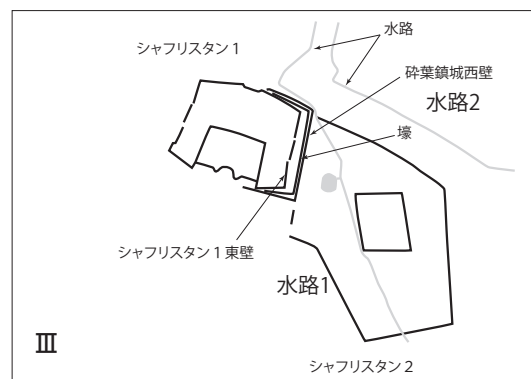


図 68b

図 68 第Ⅲ期の平面プラン

側部分の西端はシャフリスタン1の南門の東側出入口まで達していた。唐軍は、このように「コの字形」の壁を構築することで、シャフリスタン1の東側半分を囲い込んだ。また、この「コの字形」の壁を構築するにあたっては、その内側を掘削し、その土を積み上げたようで、それとともにTr.03/AKB8/23で検出された壕が並行して造られることとなった。北壁の東側部分、そして南壁の東側部分でも同じような状況であったものと考えられる。それゆえ、新たな壁が構築された地点では、「コの字形」の壁と内側に位置する旧第1シャフリスタンの壁、そして壕が並列することとなった。¹⁴⁾

「コの字形」の壁と壕が構築された結果、図68に見られるように、壕を挟んで西側にはシャフリスタン1の旧東壁、東側には碎葉鎮城の西壁（＝現在のシャフリスタン1の東壁）が並列するようになった。その一方で、現在の南西壁3の延長線上には、この「コの字形」壁の南東角が位置していることから、1966年の空中写真で確認されるこの南西壁3は「コの字形」の壁の構築以後に改築された可能性が高い。

なお、上述した通り、「コの字形」の壁が構築され、壕が掘削された時期は、碎葉鎮城が建設され、軍事拠点として機能していた679年以降、唐軍が完全に撤退した719年までのことであったと想定される。



図 69a

4) 第Ⅳ期（図69a、b）

第Ⅲ期の図（図68）にあるような状況は、少なくとも唐軍が撤退する（719年）までは維持されていたものと考えられる。その後、「コの字形」の壁の内側に位置していたシャフリスタン1の旧東壁および旧北壁と旧南壁が壊され、その土によって壕が埋められることとなった。つまり、シャフリスタン1の旧東壁や旧北壁、旧南壁が壊され、壕が埋められることによって、現在見られるような、シャフリスタン1とシャフリスタン2の平面プランが出来上がったことになる。

壕の底面には生活の痕跡を示すような土の堆積があまり見られず、比較的均質で堅い茶褐色の土が壕の幅全体にわたって水平状に堆積していることから、この壕は、唐軍によって構築された後、あまり時間を経ないうちに、一気に埋められたものと推定される。壕を埋めた時期と支配者については推測の域を出ないが、壕の底面と埋め土の間には薄い土の堆積しか確認できないことから、突騎施の蘇祿（715～738年頃）であった可能性を指摘しておく。

壕を埋め戻した時期には、この地点には人が居住しておらず、住居等が存在しない更地であったことになり、期せずして、後代の東方キリスト教会の建設に十分な敷地が確保されることとなった。

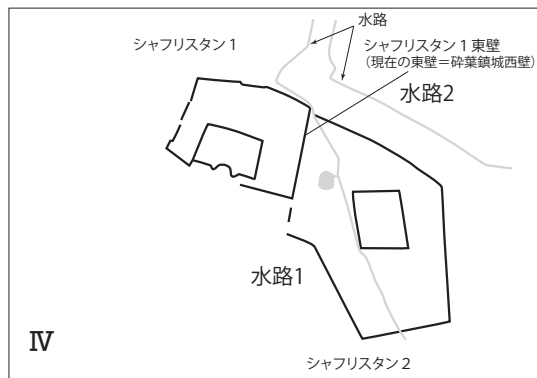


図 69b

図 69 第Ⅳ期の平面プラン

5) 第Ⅴ期（図70a、b）

第Ⅴ期は、「コの字形」の壁が造られことによって、シャフリスタン1aの平面プランが東西に長い長方形から、正形状に変化した時期にあたる。「コの字形」の壁が構築されたことによって、シャフリスタン1の北門と南門の東側の出入口が使われなくなった。

本来であれば、東西に長い長方形をなすシャフリスタン1aの全体が街区として利用されていたはずであるが、北門と南門の東側の出入口が使われなくなったことで、それぞれの東側の出入口を結ぶ南北方向の街路もまた使われなくなり、その結果、シャフリスタン1aの街区や居住区間が西側に片寄ること

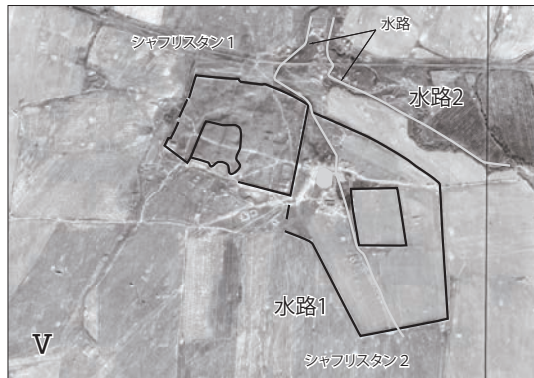


図 70a

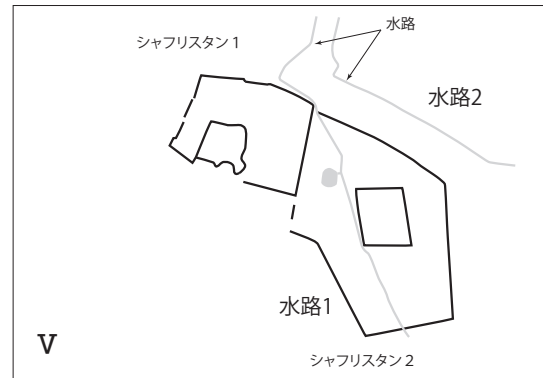


図 70b

図 70 第V期の平面プラン

となった。その後も、北門と南門の西側の出入口を結ぶ南北方向の街路を中心として人が居住したことから、西側が高くなり、現在見られるような正方形状の高まりを呈することとなった。

6) 第VI期 (図71a, b)

第VI期は、現在残されているシャフリスタン1とシャフリスタン2の平面プランである。図71a, bに点線で示したラインは、1970年代以降の土地の削平と耕地化によって失われたシャフリスタン2 (= 碎葉鎮城) の外周壁と内城 (シャフリスタン2a) の壁を示している。



図 71a

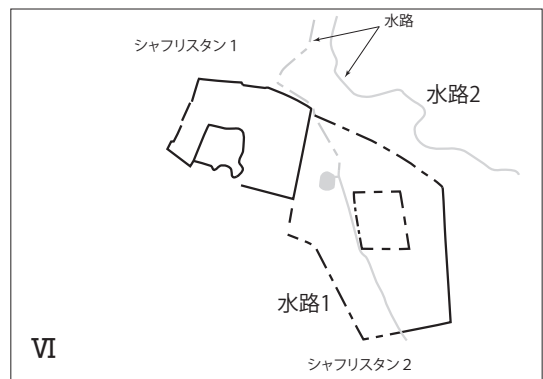
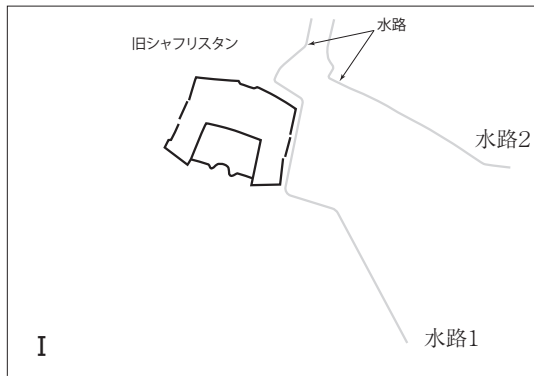


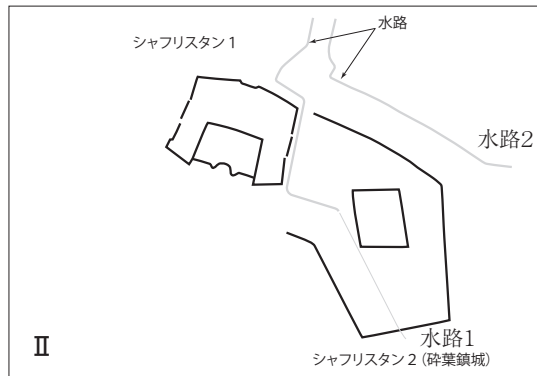
図 71b

図 71 第VI期の平面プラン



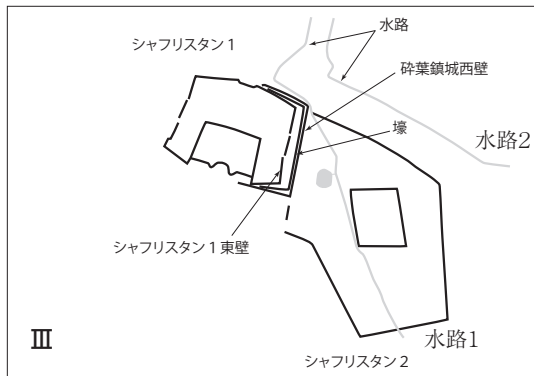
I

当初のシャフリスタン1の平面プラン



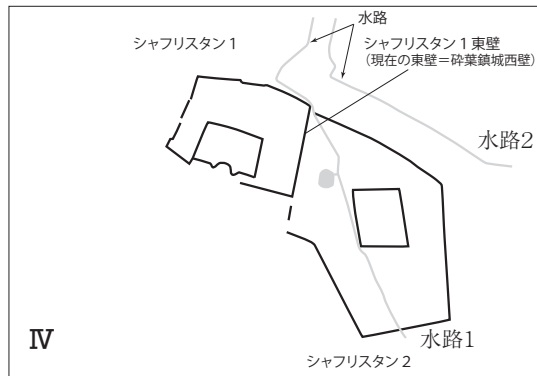
II

碎葉鎮城(シャフリスタン2)が建設されたときに構築された外壁と内壁



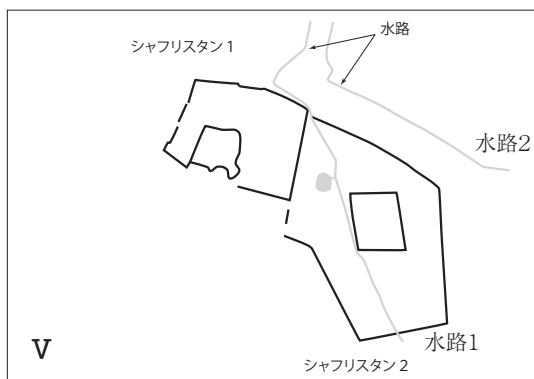
III

シャフリスタン2(碎葉鎮城)の西側に構築された「コの字形」の壁と壕。この時点では旧シャフリスタン1の東壁が残っており、2重の壁があった。



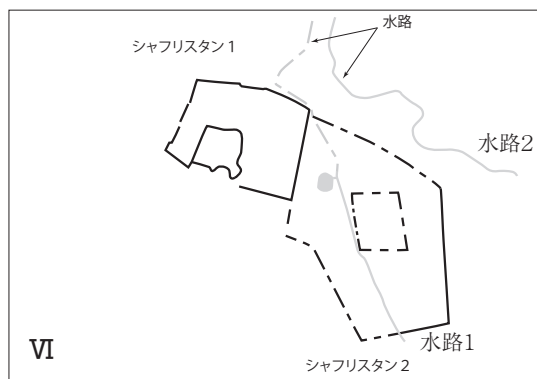
IV

旧シャフリスタン1の東壁が壊され、壕が埋められた結果、現在のシャフリスタン1の東壁(シャフリスタン2の西壁)だけが残った状態。



V

シャフリスタン1aの内部の西側の街区のみが発展し、シャフリスタン1の平面プランが変形した状態。



VI

現在のシャフリスタン1とシャフリスタン2の平面プラン

図 72 シャフリスタン1とシャフリスタン2の平面プランの変遷

Ⅷ. 王方翼の碎葉城の建設と王正見の碎葉攻撃

本論考のさいごに、王方翼が建設したとされる碎葉鎮城と王正見の碎葉攻撃について触れておく。

『旧唐書』卷一八五上「良吏伝上 王方翼」(p. 4802)には次のように記されている(齊藤 2022, p. 29)。

又築碎葉鎮城。立四面十二門、皆屈曲作隱伏出沒之状。五旬而畢。西域諸胡競來觀之、因獻方物。

【和訳】さらに(王方翼は)碎葉鎮の都市(の城壁)を建築した。(城壁の)4面に(全部で)12門を立て、(それらの門は)すべて屈曲して、(兵の)出撃や退却を隠す形となっていた。50日で(工事は)終わった。西域の外国人たちが競いやって来てこの都市を見て、土地の物を献上した。

王方翼が建設したとされる「碎葉鎮城」は、現在のシャフリスタン2であることは明らかである。その一方で、未解決のまま残されているのが、「四面十二門皆屈曲作隱伏出沒之状」が何を意味しており、現在残されているシャフリスタン2のどの部分、あるいはどの形状を指しているのかという点である。¹⁵⁾ベルンシュタム(図4)、クズラソフ(図5、6)、カジミヤカ(図7)が作成した遺跡地図、そして1966年撮影の空中写真(図63)であっても、この表現に一致するような部分や形状は確認されない。

それゆえ、王方翼が建設した「碎葉鎮城」が、シャフリスタン2の外周壁のみを指しているのか、あるいは内城のみを指しているのか、もしくは外周壁と内城を指しているのかは明らかとなっていない。¹⁶⁾

また、『通典』卷一九三「边防九 西戎五 石国条 所引 杜環『経行記』」(p. 5275)には王正見の碎葉攻撃について、以下のように記されている(齊藤 2022, p. 33)。

又有碎葉城。天寶七年、北庭節度使王正見薄伐、城壁摧毀、邑居零落。昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存。

【和訳】さらに碎葉城がある。天寶七(748)年に北庭節度使の王正見が討伐を行った際、城壁が破壊され、集落は凋落した。かつて交河公主が留置されていた所には、大雲寺が建てられており、現存している。

これは、王正見による碎葉城の「城壁摧毀」についての記述である。王正見の碎葉城攻撃の目的については、前嶋信次によって「これも恐らく突騎施の内乱に干渉したため、黒姓部を助けて、黄姓側を伐ったものではないかと想像される」と述べられている(前嶋 1982, p. 93)¹⁷⁾。ここでは、王正見が「碎葉城」のどの城壁を壊したかについての1つの可能性を提示しておく。

図73は、1966年に撮影された空中写真に写っているシャフリスタン1とシャフリスタン2であり、図74はシャフリスタン2の北側を拡大したものである。図74において○で示したのは、シャフリスタン2a(内城)の西壁の上に建てられた送電塔である。この送電塔は1966年時点ですでに存在しており、それ以後、建て直されたという情報はない。その場合、この送電塔の基礎は、1966年当時残っていた内城の西壁の上面にあったということになる。その一方で、現在水路の中に位置していることから、この地点は周囲よりも低いことが理解される。また、この地点が周囲よりも低いことは、数値標高データを用いたエレベーションからも明らかであり(図75)、本来、壁であったはずの地点が周囲より低くなっていることとなる。さらには、図74によれば、シャフリスタン2a(碎葉鎮城の内城)の北西部分の壁は、他の部分の壁に比べて、幅が広く、上面が平らになっていることが観察される。また、同じように、シャフリスタン2の北壁の東側部分(図65も参照)も他の部分の壁に比べて、幅が広く、上面が平らになっていることが観察される。

これらの地点の壁の形状が異なっている理由として考えられる仮説の1つは、これらの壁が王正見によって壊された城壁であり、その後、修復されずに残されたというものである。杜環の記録には「碎葉城」とあるが、唐軍に属していた王正見にとっての「碎葉城」は、「碎葉鎮城」そのもの、つまりシャフリスタン2であったものと推測される。さらには、「シャフリスタン2の北壁の東側部分」および「シャフリスタン2aの北西部分」の形状が異なっているのは、王正見が「碎葉城」の攻撃の際に破壊した城壁であると考えられる。その場合、王正見は碎葉鎮城、つまり、シャフリスタン2の北東側から攻撃したことになろう。

残念ながら、現時点では、上述の点以外に、この仮説を裏付ける証拠を提示することは難しい。今後、



図 73 シャフリスタン1 とシャフリスタン2(1966 年撮影の空中写真)



図 74 シャフリスタン2 の北側（1966 年撮影の空中写真）

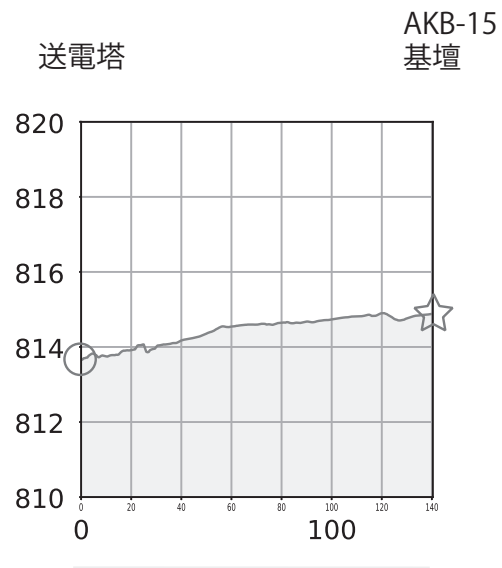


図 75 送電塔から内城の中核部までの断面図 (AW3D : DTM) から作成したエレベーション (望月秀和氏作成)

調査が進み、新たな証拠が見つかることが期待される。

おわりに

本論文では、アク・ベシム遺跡のシャフリスタン 1 の平面プランの非線対称性の要素に注目し、1966 年に撮影された空中写真の分析と発掘調査の成果を検討することで、シャフリスタン 2、つまり碎葉鎮城の建設にともなう当初のシャフリスタン 1 の平面プランに生じた変化だけでなく、シャフリスタン 2、つまり碎葉鎮城に生じた平面プランの変化を明らかにした。また、あわせてスイヤブ、つまりアク・ベシム遺跡の過去約1500年間の景観の変遷を明らかにした。

シャフリスタン 1 とシャフリスタン 2 (碎葉鎮城) の平面プランの変遷の概要は以下の通りとなる。

- ・ 5 ～ 6 世紀にソグド人によって建設されたとされるシャフリスタン 1 の平面プランは線対称形であった。
- ・ 碎葉鎮城の建設の際 (679 年) には、シャフリスタン 1 の旧東壁を碎葉鎮城の西壁として利用し、碎葉鎮城の外周壁を構築した。
- ・ その後、唐軍はシャフリスタン 1 の東側部分を取

り囲むように「コの字形」の壁を構築した。唐軍がこの「コの字形」を構築した目的は、シャフリスタン 1 の東側半分囲い込むことにあった。この時期には、シャフリスタン 1 の旧東壁と新たに構築された碎葉鎮城の西壁が並列しており、その間には壕が存在していた。北壁の東側部分および南壁の東側部分でも同じく 2 本の壁の間に壕が存在していた。

・ 唐軍が碎葉鎮城から撤退して以降に、「コの字形」の壁の内側に位置していたシャフリスタン 1 の旧東壁、旧北壁、旧南壁が壊され、その土で壕が埋められた。これによって、並列していた 2 本の壁のうち、外側にあった「コの字形」の壁 (碎葉鎮城の西壁) だけが残し、現在残されているシャフリスタン 1 の東壁となったことで、現在のシャフリスタン 1 の平面プランが出来上がった。

・ 壕が埋められたことで、シャフリスタン 1 の南東部は平坦な更地となり、のちにこの地点に東方キリスト教会が建設された。

・ 「コの字形」の壁が構築されたことで、並行して伸びていた南門と北門を結ぶ街路のうち、東側の街路が用いられなくなったことで、シャフリスタン 1a の西側が主たる街区と発展した。そのため、本来は東西に長い長方形をしていたシャフリスタン 1a は、正方形を呈するようになった。

・ 1970 年代以降に遺跡の削平と耕地化が進むこと

で、碎葉鎮城の北壁、南壁の西側部分、南西壁が失われた。

現時点ではシャフリスタン1の発掘調査が進んでおらず、また、将来的にも都市全体を発掘することは不可能であることは誰もが認識していることである。こうした前提があるにもかかわらず、「コの字形」の壁が構築され、それにともなって造られた壕を埋めるためにかつての街の壁を破壊したと仮定しても、立証できないとする批判もあろう。さらには、街の壁が改築されたという想定そのものが奇想天外であり、当初のシャフリスタン1の平面プランが線対称形であったという前提が間違っているのではないかという批判もあるかもしれない。その一方で、本論文の結論は、1つの仮説にしか過ぎないのかもしれないが、シャフリスタン1の平面プランの非線対称性を説明する重要な仮説であるものとする。

現時点では、「コの字形」の壁が構築された目的は、シャフリスタン1、つまりソグド人が建設した街と唐軍の軍事拠点である碎葉鎮城との接点をなくし、分離することにあると考えられる。その一方で、これは途中の段階で、未完成であるとも考えることも可能である。つまり、唐軍は最終的には、北側と南側の壁を延長し、さらに新たに西壁を構築することでシャフリスタン1全体を囲い込もうとしたのかもしれない。その場合、その完成形は図40bに示したようなものに近いものとなる。唐軍は、シャフリスタン1全体を2重の壁と壕で囲むことで、堅固な要塞へと改造しようとしたとも考えられよう。さらには、シャフリスタン1とシャフリスタン2を繋げて碎葉鎮城とすることを意図していた可能性がある。いずれにしても、唐軍はシャフリスタン1を要塞化することで、対遊牧民の攻撃・防衛拠点とするとともに、さらなる西方への進出の足掛かりとすることを意図していたのかもしれない。しかしながら、その時期やその動機、きっかけが何であったのかは、依然として不明である。この点については今後の課題¹⁸⁾としたい。

本研究は、JSPS科学研究費21H04984（基盤研究（S）「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷－農耕都市空間と遊牧民世界の共存－」研究代表者：山内和也）による研究成果の一部である。

註

- 1) 碎葉鎮城の建設の時期については、依然として不明な点もあるが、ここでは王方翼による建設年代を採用しておく。
- 2) 本論文では「第1／第2シャフリスタン」（とくに引用部分）と「シャフリスタン1／2」の名称が混在しているが、この名称は同じもの、つまり「第1シャフリスタン＝シャフリスタン1」である。基本的には、本論文では「シャフリスタン1」あるいは「シャフリスタン2」の名称を用いることとする。
- 3) 山内 2019では、「1967年」撮影としたが、「1966年」の誤りである。訂正するとともに、お詫び申し上げる。なお、本論文で用いた空中写真については、望月・山内ほか 2020を参照のこと。
- 4) それぞれの壁の長さおよび全周については、望月・山内ほか 2020, p. 69を参照のこと。なお、後述するように、現在のシャフリスタン1は、もともとのシャフリスタン1より大きくなっていることから、玄奘が見たシャフリスタン1の全周は2300mほどであったものと推定される。
- 5) なお、この玄奘の記録にある「素葉水城」がシャフリスタン1であるという点については、すでに柿沼（柿沼 2019, p. 49）と齊藤（齊藤 2022, p. 26）が指摘したとおりである。
- 6) これらの調査の成果については、『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』、『アク・ベシム（スイヤブ）2018』、『アク・ベシム（スイヤブ）2019』、『アク・ベシム（スイヤブ）2022・2023』を参照のこと。
- 7) ヴェデウータヴァは、この区画を「キャラヴァンサライ」と呼んでいるようである（Vedutava and Kurimoto 2014, p. 109, Рис. 16）。
- 8) セミヨーノフによって行なわれた発掘の報告については、Семенов 2002を参照のこと。また、東方キリスト教会址の発掘については、山内・岡田 2020を参照されたい。
- 9) 2017年の調査時点での成果については『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』, p. 185を参照のこと。
- 10) シャフリスタン1の東壁の中央、やや南寄りにある現在の出入口は、1966年撮影の空中写真でも確認される（図64、図65）。この出入口が、もともとあった出入口を利用したものかは明らかではない。
- 11) この窪地と第2仏教寺院の関係については、望月・山内ほか 2020, pp.110-111を参照のこと。
- 12) 図65では、シャフリスタン1の西壁の西側に水路が流れていることがわかる。AKB-8区の調査では、陸水成堆積層の存在が確認されていることから、東壁の東側でもこのような状況であったと想定できる。
- 13) 貯水池については、自然の池であるとする見方もあるが、池の東側は土手となっており、また、おおむね方形をなしていることから、明らかに人為的に構築さ

れたものである（図64、図65）。池の北側には道路が位置しているが、これもまた、貯水池の北側の土手を利用したものであろう。この貯水池は唐軍による水路の流路の変更とともに構築されたものと考えられる。唐軍は水の確保の目的として、水路の流路を変えるとともに、この貯水池を構築したのであろう。この貯水池については、望月・山内ほか 2020, pp. 116-117 を参照のこと。

- 14) この「コの字形」の壁の基礎の下層の地盤は脆弱な陸水成堆積層であったが、2本の壁とその間に位置する壕が並列する構造となったことから、外側、つまり唐軍が構築した「コの字形」の壁の脆弱性はさほど大きな問題ではなかったのかもしれない。その意味では、唐軍はその脆弱性を理解したうえで、この地点に「コの字形」の壁を構築したともいえる。
- 15) 「四面十二門」という表現とそれが意味することに関する考察については、柿沼 2019, 51-52を参照のこと。
- 16) 王方翼は肅州刺史に任ぜられた際、「兵卒を動員して塹壕を浚渫し、多渠水の水を引いてきて、州城の周囲をめぐるせて堀とした」ことが知られている（柿沼 2021, p. 61, あわせてp. 42, p. 51も参照のこと）。王方翼は、このような土木工事の才能を認めれて、碎葉鎮城の築城を命じられたのかもしれない。
- 17) タラス河畔の戦いと唐軍の動き、およびその前後の碎葉城については齊藤 2023を参照のこと。
- 18) 仮説にすぎないが、692年に唐軍が碎葉鎮城を奪還したことで、唐王朝の碎葉鎮城の経営や西方進出に関する政策が変更されたものと考えられるが、このことが、「コの字形」の壁を構築することでシャフリスタン1と碎葉鎮城（シャフリスタン2）を分離する、もしくはシャフリスタン1全体を囲い込んで、碎葉鎮城（シャフリスタン2）に組み込むきっかけとなった可能性がある。いずれにしても、この点に関しては、歴史的背景も含め今後の検討課題としたい。

参考文献

- 柿沼陽平「唐代碎葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集、2019年、pp. 43-59。
- 柿沼陽平「王方翼攷－『旧唐書』巻185 良吏王方翼列伝訳注を中心として－」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集、2021年、pp. 41-67。
- 川崎建三、山内和也「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査－1939年、1940年－」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集、2020年、pp. 215-245。
- 齊藤茂雄「文献史料から見た碎葉城」『帝京大学文化財研究所研究報告』第21集、2023年、pp. 25-37。
- 齊藤茂雄「アク・ベシム遺跡出土「杜懷寶碑」再読－大雲寺との関わりをめぐる－」『帝京大学文化財研究所研究報告』第22集、2024年、pp. 71-84。

齊藤茂雄「タラス河畔の戦いと碎葉－唐の出兵目的をめぐって－」『東洋學報』第105号第2號、2023年、pp. 31-64。

帝京大学文化財研究所、キルギス共和国国立科学アカデミー『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』2022年
帝京大学文化財研究所、キルギス共和国国立科学アカデミー『アク・ベシム（スイヤブ）2018』2021年
帝京大学文化財研究所、キルギス共和国国立科学アカデミー『アク・ベシム（スイヤブ）2019』2020年
帝京大学文化財研究所、キルギス共和国国立科学アカデミー『アク・ベシム（スイヤブ）2022・2023』2024年
前嶋信次「タラス戦考」『民族・戦争－東西文化交流の諸相－』誠文堂新光社、pp. 41-112。

水谷真成訳、玄奘著『大唐西域記』平凡社、1971年。

望月秀和、山内和也、バキット・アマンバエヴァ「空中写真によるアク・ベシム遺跡（スイヤブ）の解析」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集、2020年、pp. 61-126。

山内和也「アク・ベシム遺跡第1シャフリスタンの都市プランの変化」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集、2019年、pp. 1-17。

山内和也、岡田保良「スイヤブ（アク・ベシム遺跡）のキリスト教会－第8号遺構：キリスト教会複合体－」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集、2020年、pp. 247-319。

Бернштам, А. Н. Труды Семиреченской археологической экспедиции «Чуйская долина». «Материалы и исследования по археологии СССР», № 14. М. - Л., 1950 г. [セミレーチエ考古学調査団報告集「チュー川流域」『ソ連考古学の資料と研究』, 14号, モスクワ－レニングラード, 1950年)]

Кожемяко, П.Н., Раннесредневековые города и поселения Чуйской долины, Фрунзе, 1959 [P. N. カジミヤカ『チュー川流域の中世初期の町と集落』1959年、フルンゼ]

Кызласов, Л.Р. Археологические исследования на городище Ак-Бешим в 1953-1954 гг. // ТККАЭ. 1959, т. II. С. 155-24 [「1953～1954年度の都市遺跡アク・ベシム遺跡の考古学調査」『ТККАЕ（Труды Киргизской комплексной археолого-этнографической экспедиции Киргизии）1959, II卷, pp.155-241]

Кызласов, Л.Р. Цивилизация Центральной и Северной Азии, Исторические и археологические исследования, Москва, Издательская Фирма, Восточная Литература, РАН, 2006 [L.R. クズラソフ『中央・北アジアの都市文明』モスクワ、東洋文学出版社、РАН、2006年。

Семенов, Г. Л. Суяб, Ак-Бешим, Государственный Эрмитаж (Россия), Институт Истории НАН Кыргызстана, Санкт-Петербург, 2002. [『スイヤブ、アク・ベシム』国立エ

ルミタージュ（ロシア）、キルギスタン国立科学アカ
デミー・歴史研究所、サンクト・ペテルブルク、2002年].
Vedutova, L. M. and Kurimoto, Sh., Paradigma of Early Middle
Age Turkic Culture: Ak-Beshim Settlement, 2014, Bishkek.
『旧唐書』／『通典』＝中華書局標点本